

607
84

無産者講話

山川均著



0035023-000

607-84

無産者講話

山川均・著

無産社

昭和5

AGC

無產者講話

山川均著

0393



無產社版

1930

無產者請話

神州均著

...





山川

均著

無產者講話

無產社版



607-84

はしがき

この講話は、無産者運動と緊密な関係にある多くの題目のうちから十数項目を選び出し、特別な準備のない一般大衆の理解を目標として、平易な説明を試みようとしたものであつた。しかし紙数の制限のため、豫定のうちの僅かに七項目を収め得たに過ぎなかつた。

したがつてこの講話は、一冊の読み物たる體裁をなしてはゐるが、むしろ各項目が、おのこの獨立の読み物となるようにつとめたものである。

かようにこの講話は、七つの題目をほとんど別々に説明し、かつその題目は豫定の半分にか及ばなかつたが、なほかつ無産者運動のいろく々な形態ないしは方面を、ほど引つくるめて説明した形となつたので、これらの講話の全體に對して「無産者運動」といふ標題を與へることも、必ずしも不當ではあるまいと思ふ。

この講話は昨年中、「無産者講話」と題し、單行本として刊行したものである。たまく「無産者自由大學」の講座中に、無産者運動に對する一般的な概念を與へる科目——ちようどこの講話に近い内容のもの——が漏れて居り、讀者からもこれを挿入する要求がしきりにあるといふことで、發行者から、この講話を以つてそれに充てたいといふ提議を受けた。すでに單行本として刊行せられた舊稿ではあるが、發行後間もなく絶版の状態となり、少數讀者の手にしか渡つてゐないといふ事情に鑑み、さらに若干の改訂を加へて標題を「無産者運動」と改め、發行者の希望に應ずることとした。

著者

目次

はしがき

第一講 社會……………三

社會をはなれて人間はない……………三

自然の環境と社會といふ環境……………三

個人と社會……………五

社會は一つの組織である……………六

この組織は變化する……………八

社會の組織とは生産の組織である……………九

この組織は何故に變化するか……………二二

第二講 資本主義の社會……………二五

資本主義の社會とはどんな社會か……………二五

目次

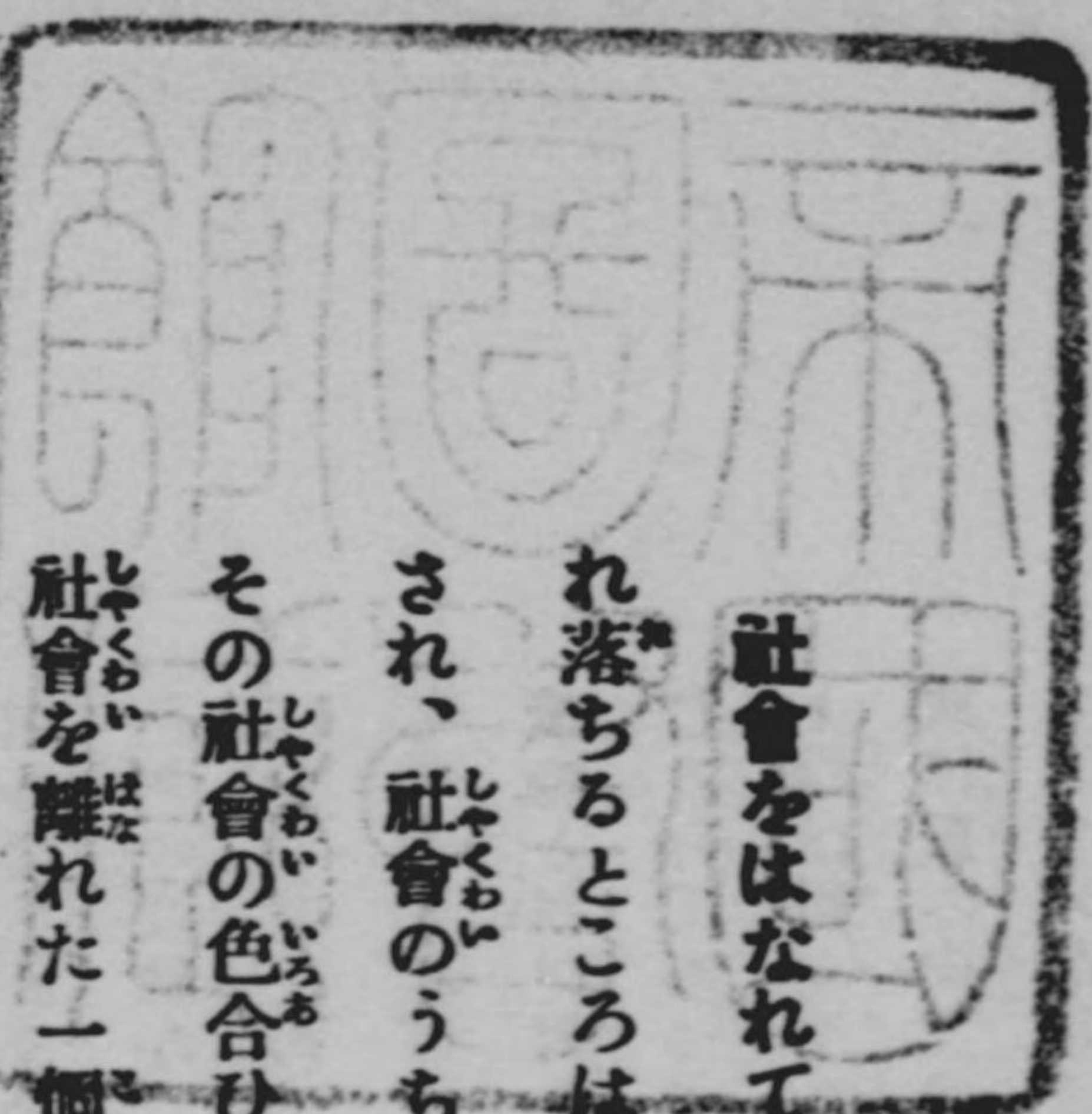
| | |
|-----------------------|-----|
| 職別主義の組合 | 八〇 |
| 地方評議會の組織 | 八三 |
| 産業別主義の組合 | 八五 |
| 全般的總同盟——全階級的の組合組織 | 九〇 |
| 労働組合の組織の目標 | 九二 |
| 國際的の組織——労働組合インタナショナル | 九四 |
| 労働組合の職分とその進化 | 九七 |
| 労働組合と經濟闘争 | 一〇一 |
| 労働組合は何をなすべきか | 一〇六 |
| 左翼運動と左翼組合 | 一〇八 |
| 第六講 資本主義下の農民 | 一一三 |
| 資本主義社會における前時代の生産方法の遺物 | 一一三 |
| 資本主義と農業 | 一一五 |
| 資本主義の衣裝をつけた農奴制度 | 一一八 |

| | |
|--------------------|-----|
| 農村における階級の分化 | 一二三 |
| 農村の諸階級 | 一二七 |
| 大地主の階級 | 一二八 |
| 自作農の階級 | 一三〇 |
| 小作農の階級 | 一三三 |
| 工業プロレタリアと小作農 | 一三四 |
| 農民組合 | 一三六 |
| 第七講 無産階級の政黨 | 一四〇 |
| 組合主義の政治運動 | 一四〇 |
| 社會民主主義の政治運動 | 一四二 |
| プロレタリアの政治運動 | 一四四 |
| 無産階級の政黨 | 一四五 |
| 日本の無産政黨 | 一四六 |
| 単一無産政黨の任務 | 一四七 |

無産者講話

単一無産政黨の基調——労働者と農民との結合……………一五二
無産政黨とその他の社會層……………一五
大衆的政黨と前衛分子……………一五

第一講 社會



社會をはなれて人間はない。魚は水の中に生まれる。松露は砂の中に生える。人間の生まれ落ちるところは水の中でも砂の中でもなくて「社會」である。吾々は社會のうちに生み落とされ、社會のうちに大きくなる。青葉を喰つて成長する虫が青くなるように、人間は眞底からその社會の色合ひによつて染められる。水を考へないでは魚を考へることが出来ないように、社會を離れた一個人といふものはない。

自然の環境と社會といふ環境。もつとも魚が水の中に生まれるように、人間は空氣の中、太陽の光線の中、この地球の表面といふ自然の環境の中に生まれるにはちがひない。しかし人間は如何なる場合にも、一人でこの環境の中に立ち、一人でこの自然力と相ひ對してゐることはない。個々の人間と自然力といふ環境との間には、いつでも社會がその間に立つてゐる。

水中で明けてゐられる眼、体内に備へ附けてある浮き袋、腮、それから魚のいろ／＼の本能、こうしたもの——これを引つくるめたものが魚である——は、すべて自然の環境——直接には水中といふ環境、間接にはすべての自然力——に順應して出来上がったものである。人間もその通りであつて、人間の肉體の組立ても、精神すなはち物を考へる働きも、直接にはこの地球の上、間接には一切の自然力といふ環境に順應して今日あるが如くに出来上がったものである。吾々は、光と名づける作用を起すようなエーテルの波動のあるこの宇宙のうちに生長したればこそ、吾々の肉體には、このエーテルの波動を、光として受け留める仕掛——眼と名づける官覺器——を發達した。また光といふ關係においてこの宇宙を理解する心の働きをも備へてゐる。だから人間を人類といふ生物の一つの種として考へれば、その環境とは、人間以外の一切の自然力である。しかし人間は決して一人々々でこの環境と相ひ對してゐるものではない。たとへば寒さといふ自然の力は、人間が一人々々めい／＼に感じるのであつて、社會がひと纏めに寒さを感じる譯ではない。そこで人間は、一人々々で自然の環境と相ひ對してゐるかのようである。しかしこの場合にも、人間はその當時の社會の發達程度により、或は獸の皮で造つた粗末な着物、綿や羊毛を紡いで作つた精巧な織物、スタンダード石油會社の石油ストーヴなどによつて寒さと闘ふから、やはりこの場合にも自然の環境と人間との間には、社會が介在する。人間は自然の環境と闘ひ、これに順應して發達したものであるが、如何なる場合にも一人々々ではなくて社會としてこの環境と闘ひ、社會としてこの環境に順應するのである。そこでかよう

な意味では、自然は吾々の周圍を大きく取り巻いてゐる環境であつて、社會は直接に吾々を取り巻いてゐる一とまわり小さな環境だともいふことができる。

かように人間は、一人々々で自然の環境と闘はないで、いつでも社會を通ほして環境と相ひ對するから、従つてまた環境に順應する仕方——または環境との闘争に順應する仕方——が、水に對する魚の場合とは違つてゐる。たとへば寒さと闘ふためには、紡績機械の發明によつて自然の環境に順應してゆくから、必ずしも人間の皮膚が直接に順應の作用をし、人間に羊の毛や熊の毛が生える必要はない。いふまでもなく紡績機械の發明は、社會的の順應である。

個人と社會　しかし社會と水とは、全然同じものではない。水はどこまでも魚とは別物であつて、魚が集まつたものが水ではない。ところが社會は個人の集まつたものである。社會を離れた人間といふものはない。それと同時に、一個人たる人間がゐるなければ、もちろん社會はあり得ない。社會は個人の集りである。

そこで社會が先きか個人が先きかといふ質問がよく起こる。しかしこの質問に答へることは、鶏が先きか卵が先きかといふ質問に答へるよりも、はるかに容易である。發生の前後からいへば、社會と個人とは同時に出来たものである。しかし現在では、出来合ひの一個人が集まつて新たに社會を作るのではなくて、個人は出来上がったる社會の中に生み落されるものである。社會が先きで個人が後

である。個人の完成によつて初めて完全な社會が出来上がるといふ考へは、社會は個人の集りたといふことを、たゞ機械的に解釋した誤つた考へである。

社會は個人の集つたものである。しかしたと個人が集まつたといふだけでは、社會は出来上がらない。社會は個人の集團には違ひない。それと同時に、社會はそれを形造つてゐる個人を合計しただけのものではない。社會は個人を合計したもの以上の或るものである。この或るものが、社會の最も根本的な性質である。この或るものとは何だらう？

社會は一つの組織である。この書物の一ページの文章には、五百個餘の活字が並んでゐる。しかしこれと同じ活字を同じ數だけ、箱に入れてかき混ぜたばかりでは、決してこの一ページの文章と同じ意味を現はした文章とはならぬ。恐らく、どんな意味を現はした文章ともならぬだらう。

時計は大小八つばかりの歯車の組み合せて出来てゐる。しかしこれと同じ歯車を同じだけ入れに入れて何度かき混ぜても、時間の分るきづかひはない。なぜだらう？ 時計は歯車の集團

である。けれどもそれと同時に、時計はこれを形造つてゐる歯車を合計したものの以上の或るものだからである。八個の歯車が時計の働きをするためには、或る定まつた歯車は、ほかの定まつた歯車と噛み合ひ、その歯車はまた一定のほかの歯車と噛み合ひ、こうして八個の歯車の一つづつが、そこから動かすことの出来ない一定の關係、一定の位置におかれてゐなければならぬ。言葉をかへて云へば、八個の歯車でもつて一つの體系ないしは組織が出来上がった時、歯車は初めて時計の働きをするのである。八個の歯車をたゞ合計したものは、時計ではなくてやはり歯車である。單なる歯車を時計にするものは、こうした組織ないしは體系——一つ一つの歯車が、その他のすべての歯車と一定の關係に立つことである。

個人と社會の場合もその通りであつて、おの／＼の個人が、その他のすべての個人と一定の關係で結びつけられ、一つ／＼の歯車が歯車全體のうちに一定の位置に立つように、おの／＼の個人が集團全體のうちに、一定の位置に詰めこまれた時、この一人の集團は、もはや單なる一人の合計ではなくて、一人の合計以上の或るもの——即ち社會——となるのである。

そこで吾々は、個人の集團を、單なる一個人の總計以上の或ものたらしめるものは、こうした關係である——言ひ換へれば、一定の組織ないしは體系である——社會とは多くの個人によつて出来上つてゐる一つの體系、ないしは組織であつて、吾々はこの體系または組織の一部分として、この體系または組織のうちの一定の位置におかれ、一定の關係に置かれてゐるものだといふことを知るのである。

この組織は變化する　しかし時計の齒車の組み合せ方、「組織ないしは體系」はみな同じであつて、どの時計でも違ひはないが、社會の場合にはそうでない。おの／＼の個人とその他のすべての個人との關係、即ち組み合せ方、「社會の組織ないしは體系」は決して一と通りではなくて、いろいろあり、決して一定不變なものではなくて、いろいろに變化する。そしてこの組み合せの違ふに従つて、いろいろの形の社會が現はれる。

たとへば、一方には領主だとか貴族だとかいふ比較的少數の人々が土地を持つてをり、人口の大多數を占める百姓は、年貢を納めてこの土地を耕やすとか、またはめい／＼の土地として

與へられた僅かな地面を耕やして生活し、その餘の時間は、無報酬で領主や貴族の土地を耕やす義務を負ふ、そして可なり澤山の人間は、武士だとか家臣だとか、または従僕などとしてこれ等の領主や貴族に寄生して生活する。社會がこうした關係で出来上つてゐれば、その社會は封建制度の社會、または農奴制度の社會と名づける特別な形の社會である。

これに反して一方には、工場や機械や原料を持つた資本家と名づける少數の人々があり、これに對して他方には、多數の労働者が、労働力の賣手といふ關係に立つ。社會がこうした組み合せで成り立つてゐれば、その社會は、資本主義の社會と名づける特別な形の社會となる。

かように社會の組織ないしは體系には、いろいろあり、またいろいろに變化するのは、何故であらうか。これは社會の組織ないしは體系なるものは、一たゞ何を意味してゐるか、社會のうちのこうした人と人との一定の關係組み合せは、そもそも何によつて定まつたか、を考へて見ればよく分る。

社會の組織とは生産の組織である　そこでもう一度、魚を引合ひに出すならば、魚の形態

は、水といふ環境に順應して出来上つてゐる。社会の形態もその通りであつて、直接にはこの地球の上、間接には一切の自然力といふ環境に順應して出来上がつてゐるものである。社会が生き永らへてゆくためには、自然の中から、生活に必要な一切の資料を取り出さねばならぬ。これが爲めには、社会は自然力（即ち環境）と闘はねばならぬ。自然は人間が闘つて取らなければ、何物をも與へない。そこでこの闘ひの必要が、社会を形造つてゐる個人々々を一定の持場々々に割り當てる。或る者は石の鏃のついた矢と弓とを持つて獵にゆく。或る者は尖つた棒を持つて浅瀬の魚を突きにゆく。或る者は獸の毛皮で着物を作る。そして獲物や衣類は、この自然力と闘争するための軍隊——社会の全員——を最も有効にまかなふ方法として、これを作つたり手に入れた一人のものではなく、社会全體のものとして、社会の全員の必要に應じて分配された。原始時代の社会では、人々はこうした關係に立ち、人々はこのように組み合せられてゐた。この關係この組み合わせは、そも／＼何を意味するだらうか？ それは自然の中から生活の資料を取り出すための闘争の陣立に外ならぬ。

社会が自然のうちから生活の資料を取り出す闘ひが、即ち社会の労働である。だから社会の組織とは、つまりは社会の労働の組織である。また社会が自然のうちから生活の資料を取り出すことが、即ち社会の生産である。だから社会の組織とは、つまりは社会の生産の組織であると云つても同じことである。

しかし社会は、衣食住の資料を生産する活動ばかりやつてゐるものではない、現に最高の學問、學問のための學問を教へてゐる大學はどうか、議會はどうか、そこでは生産や労働とは關係のない、澤山の法律をこしらへてゐるではないか、宗教、道徳、藝術などにいたつては、生活資料の生産などは、まるきり方角の違つた活動ではないか、然るにこれ等の制度も、現在の社会の體系の一部分であることは争はれぬ、と。こゝいふ批評が出るかも知らぬ。なるほど大學は工場ではない。議會は農場ではない。これ等の制度は、社会が生活資料を生産する活動には、直接關係して居らぬ。しかしその關係は、皮相な觀察者の考へるほど縁遠いものではない。社会が全體として、現在の生産の仕組みを續づけてゆくためには、大體において、現在の大學で教へてゐる學問も、議會でこしらへてゐる法律も、宗教や道徳によつて民衆の間に養つてゐる心理状態も、ことごとく皆な、必要缺ぐべからざるものだと思ふことができる。生産の組織に直接に關係のないすべての制度なり思想なりは、この生産

の組織に間接に必要なものであるか、さもなくばこの生産の関係を反映したものであつて、つまりは社会の生産の組織に根ざしてゐるものである。

この組織は何故に變化するか

社会の組織組み立ては、社会が自然の中から生活資料を取り出すための陣立だとしたならば、この自然に大きな變化が起これば、従つてこの陣立にも大きな變化が生ずる筈である。たとへば地底にある石炭と石油とが、一夜のうちに無くなつたとすれば、それこそ今日の社会の組織の上には、一大變化を起すにちがひない。しかし地球の上には、このような大激變がのべつに起こつてゐる譯ではない。ところが自然の環境には大した變化のない時にも、社会の組織組み立ては變化する。それは常に變化しつゝあると云つてもよい。

これに反して、社会が自然の中から生活資料を取り出す道具と技術——即ち生産の道具と技術——とは絶えず進歩する。闘ひの武器が變れば、勢ひ闘ひの陣立が變化する。弓矢が主なる生産の道具であつた時代には、この道具に照應した社会の組織が出来上がつてゐた。人間が

牧畜といふ生産の技術、さらに進んでは耕作といふ新しい生産技術を見出すと、社会の組織組み立ても、これに伴なうて變化した。この鋤と鍬との農業が、トラクターとスチームフラオの農業に進歩すると、社会の陣立もそれに應じて變らねばならぬ。工業の方面でも同じことで、簡単な道具と手工で品物を生産してゐた時代には、これに照應して社会の組織が定まつてゐた。蒸汽の應用によつて生産の道具が一變すると、社会の組み立ても一變した。かように生産の道具と生産の技術が進歩すれば、生産の方法が變化し、直接これに關係した組織、即ち社会の生産の組織、労働の組織が變化する。社会の労働の組織、生産の組織が變化すれば、これにもとづいて出来あがつてゐる、分配や消費の方面までも含めた社会の經濟組織全體にわたつて變化がおこる。こうして社会といふ大きな建物の土臺が變つてくれば、その上に築かれてゐる政治や法律はむろんのこと、學問、宗教、道徳、藝術のような、一見、生産とは縁遠いようなものまでも、ことごとく變化する。即ち社会の組織全體が變化するのである。

もちろん糸車が紡績機械に變つても、ただこの一つの變化だけで、たちまち社会の組織が一變する

ものではない。ある社會の生産の道具といふ場合には、その社會を給養してゆくために必要な一切の生産の道具を指すのであつて、そのうちの一小部分が變化しただけでは、社會組織に根本的な變化は起こらない。それと同時に、ほかの生産の道具や技術がそのまゝで、たゞ糸車だけが紡績機械に進歩するといふことも、實際には有り得ない。

こうして原始共產制度から踏み出した人間の社會の組織組み立ては、生産の道具と生産の技術の進歩につれ、奴隸制度の社會、中世の封建制度と農奴制度と手工制度の社會をへて、今日の資本主義の社會に發達したのである。

第二講 資本主義の社會

資本主義の社會とはどんな社會か 今日の社會は奴隸制度の社會でもなければ、封建制度の社會でもなくて、誰でも口にしてゐるように、資本制度の社會、ないしは資本主義の社會である。それでは資本主義の社會とは、そもそもどんな社會だらう。

今の世の中は、三十時間で江戸から長崎まで、ねてるて行かれる世の中である。今の世の中は、ラヂオと、カフエーと、活動寫眞の世の中である。今の世の中は、いたるところの歡樂の巷で、男と女が抱きついて踊り明かしてゐる世の中である。今の世の中は、結核菌が人間の九分九厘までをおかしてゐる世の中である。今の世の中は、身投げ、強盜、殺人、首くくり、發狂の新聞記事が、毎朝のコーヒーと共に、なくてはならぬ興奮劑になつてゐる世の中である、等々々々々。

こうした事柄も、今日の社會の著るしい性質の一つ一つには違ひない。しかしこれ等の性質を數限りなく並べただけでは、資本主義社會を描き出したものとは云はれない。社會の形態または社會の組織組み立ては、その社會が自然のうちから生活の資料を取り出すための——即ち生産の——陣立である。そこで今日の社會は、これを生産の組織と見て、それは奴隸制度の社會や封建制度の社會と異つたどのような仕組になつてゐるかを學んだ時、吾々は初めて資本主義の社會とは、どのような社會であるかを學んだことになる。

今日は機械工業の時代

先づ第一に、今日の社會が自然のうちから生活の資料を取り出す

——即ち生産の——主たる方法は、工業である。工業と云つても、昔の手工業や家内工業ではなくて、機械の力を應用する工業である。もつとも今日の社會でも、生活に必要な一切のものが、何から何まで、大規模な機械工業で生産せられてゐる譯ではない。言葉をかへて云へば、今日の社會でも、資本主義以前からの生産の方法が、ちつとも用ひられてゐない譯ではない。事實は反對で、現に米や麥のような重要な食料の生産にしても、もちろん色々な新しい農具や

耕作法が取り入れられはしたものと、まだかなりの範圍までは、封建社會からの使ひ來りの鋤や鉞や、から竿などがそのまま用ひられてゐる。そのほか吾々が日常使つてゐる日用品のうちにも、昔ながらの手工業や家内工業によつて製造されたものが澤山ある。しかしこうした生産の方法は、資本主義の社會が封建社會から譲り受けた遺物として残つてゐるものであつて、決して資本主義社會の特徴ではないのである。どんな社會も、その以前の社會と全く無關係に、まるきり新規播き直しにこしらへ上げられたものではない。新しい社會は、舊る社會と異なつた特質を備へてゐるといふ意味では全く新しい社會であるが、同時に舊る社會の相續人である。だからそのうちには、多かれ少なかれ舊る社會の遺物が残つてゐることに、ちつとも不思議はない。資本主義の社會がその生活の資料を得るために、前時代の特徴だつた生産の方法にたよつてゐることの多いと少ないとは、その社會が、資本主義的にどの程度まで發達してゐるかによつて違つてくる。

そこで今日の社會も、その生活を維持するためには、手工業や家内工業などにもたよつては

るが、それにも拘らず、今日の社會を資本主義の社會として、それ以前の社會と根本的に異つたものにしてゐる特質は、機械の力を應用する大規模の工業である。

手工業、家内工業、それから小農制度の農業などは、資本主義以前の生産方法の遺物である。しかし今日の社會には、機械工業の生産といふ領分だけに資本主義が行はれて居り、手工業、家内工業、小農業などは、超然として資本主義經濟の範圍外勢力外に立つてゐるといふ意味ではない。言ひ換へれば、今日の社會には、資本主義の生産組織と資本主義以前のふるい生産組織とが、雜然として混ざり合つてゐる譯ではない。資本主義は今日の社會の組織であり體系であつて、資本主義以前の生産の方法も、資本主義社會に残つてゐる限りは、やはりその支配を受け、同じ體系に織り込まれて、その一部分として働らいてゐるものである。たとへば日本現在の社會——いふまでもなく資本主義社會である——の生産の道具、または生産力といふ時には、それは紡績機械や溶鐵爐のみで出来上つてゐるものではなく、鋤や、鍬や、手織機までも含めたものである。資本主義は鋤や鍬や手織機のようなこれらの資本主義前の生産の道具をも、その經濟に必要な範圍においては、これを存しておき、そのまま、資本主義の養子とし、または奴隸として役立てゝゐるのである。この場合には、鋤や鍬や手織機そのものは、資本主義以前も今日も、物質的には何らの變りはないが、これらの道具が社會の經濟のうちに演じてゐる役割には、非常な相異がある。即ち同じ生産の道具も、その性質が一變してゐるのである。

大量生産と工場制度 かように機械力を應用して生産するといふことは、勢ひ、品物を大規模に生産することを意味してゐる。たとへば一週間に三足の靴しか造る必要のない場合には機械力を用ひることは馬鹿けてゐる。そこで機械工業による生産は、一つの工場なり職場なりで、同じ品物ばかり——ないしは比較的種類の少ない似寄つた品物ばかり——を大量的に、かつ間斷なく生産することを意味してゐる。即ち機械工業は、一つの工場なり職場なりで、同じ品物、ないしは比較的いろ數の少ない似寄つた品物を、比較的大量に、且つ連続的に生産する必要があつてこそ、初めて成り立つものである。

したがつて手工業の場合には、澤山の小さな職場で製造せられてゐたものが、機械工業では比較的少數の工場で、一とまともに製造されることになる。昔は家々に糸車を備へて糸を紡いでゐたが、今日は日本全國に、僅かに五十餘會社に屬する二百七八十の紡績工場があつて、これだけの工場で、日本全國で入用な糸のざつと二倍の糸が紡ぎ出されてゐる。かように機械による生産は、手工業などは較べものにならぬほど大規模な機械を据えつけ、大きな仕事場に

澤山の労働者を集めて、一つの動力で運轉するこの大きな機械組織の下に働らかせる、謂ゆる工場制度となる。

資本主義の生産は機械力による生産であるから、資本主義の生産は、さつと以上の如き性質を持つてゐる。

しかしこれだけの性質を寄せ集めたのでは、必ずしも資本主義の社会組織とはならぬ。

例へばロシアでも、右の通りの機械工業が行はれてゐるが、これ等の機械や工場は一人の持物ではなくて、國家のものである。そして國家の機關たる政府は、これ等の工場で働らいてゐる労働者が選挙した委員で出来てゐる。この場合には、資本主義とは異つた社會の組織が生まれることになる。

少数の人々による生産手段の独占　そこで機械による生産のこうした性質が、いよく資本主義となるためには、それは次に述べるような事情と結びつかねばならぬ。従つてこの事情こそ、資本主義社會の眞髓なのである。

前にも云つた通り、機械工業には大仕掛けな機械や設備、大規模な工場などが必要である。

そして澤山の原料品を消費して、同じ品物を大量的に生産する。生産に必要な機械や建物や原料などを指して、生産手段といふ。そこで機械工業の場合には、大規模な、従がつてまた驚くべき高價な生産手段が必要である。従つて家ごとに一挺の糸車を備へてゐたように、家ごとに紡績機械を据えつける譯にはゆかぬ。またアイゴで仕事をしてゐた鍛冶屋の親方が、めい／＼煉鐵爐を備へつける譯にはゆかぬ。これは不可能であるばかりでなく、不必要である。

かように高價な大規模な生産手段は、手工業の場合の小規模な生産手段のように、數多くの小さな生産者が、一人々々で持つには適しない。そこでこれ等の生産手段は、誰れか極く少数の人々が持つか、さもなくば一人として誰れもが持たないほかに道はない(例へばロシアのように)。ところが資本主義社會では、すべてこれ等の生産手段は、資本家と名づける極く少數の人々だけが獨占して持つてゐる。そして社會の大多數の人々は、何らの生産手段をも有しない。小さな職場と、アイゴと、鐵床と、玄能とが主たる生産手段だつた時代には、十人並みの職人は勤勉と節約さへすれば、無一物から生産手段の所有者になることが出来た。今日の鐵

工のうちには、一生涯の賃銀を貯金にして、大製鐵工場を起こそうなど夢みてゐるものは一人もない。

三

賣るための生産、即ち商品生産　そこで生産手段の所有者である資本家は、その工場で例へば米を生産する。この工場には、例へば一萬本の錘が運轉してゐるとすれば、一日に一千貫匁の米が生産される。この米は、紡績會社の重役が使用するためにこしらへてゐるものではないことは、無論である。彼等が一年間に使用する米は、その工場で一日間に生産される米の僅か何萬分の一、何十萬分の一であつて、それすらも彼等は直接に、自分の工場でできた米を使ふわけではない。これに反して彼等の用ひてゐる衣類被服の材料は、大部分は、却つて彼等の工場ではできない絹や毛織である。そこで今日資本主義の社會では、生産手段の所有者は、自分に必要なものを生産するのではなくて、自分に必要なものを生産し、自分で消費するためを生産するのではなくて、賣るために生産してゐるのである。昔は使用する目的で必要なものを生産し、その餘分が、たまく市場に持ち出されて商品となつた。しかるに資本主義社會の

生産は、賣るための生産である。即ち資本主義の社會では、生産とは、たゞに生活に必要な品物を生産することではなくて、賣るための品物——即ち商品——の生産である。

資本家は利潤のために生産する　使用を目的とする品物の生産は、その品物によつて何等かの必要をみたすことにより、即ちその品物を使用することにより、消費することによつて、生産の目的が達せられるのであるが、賣ることを目的とする商品の生産は、たゞその商品が賣れたのでは、生産の目的が達せられたものではない。もし百圓の費用をかけて生産した商品が百圓にしか——或は八十圓にしか——賣れないなら、資本家は決して生産せぬ。そこで商品の生産は、賣るための生産であるばかりでなく、利益を見て賣るための生産である。資本主義の社會では、生産手段の所有者たる資本家は、儲けるために——即ち利潤を得るために——その生産手段を用ひて生産するのである。

かように資本家が商品を生産する目的は、利潤であつて、その品物を必要とするからではない。しかし商品が相當の利益を見て賣れてゆくためには、その商品は、これを生産する資本家

自身に取つては不必要なものであつても、他の何人かに必要なるものでなければならぬ。そこで資本家は、たゞ利潤を得ることのみを目的として、自分には必要のない品物を生産してゐるが、斯くすることによつて、自分以外の人々にとつて必要なもの、ないしは社會にとつて必要な品物を生産してゐることになる。乙の資本家、丙の資本家、丁の資本家、みなその通りであつて、彼等を驅つて商品を生産せしめる動力は、利潤である。彼等はたゞ自分の懐に利潤を収めることを唯一の目的とし、たゞ利潤を追ふて走つてゐるもので、決してその他の事柄をかへりみぬ。しかしそうすることによつて間接には、社會にとつて必要な生活資料が生産せられてゐる。言葉をかへて云へば、資本主義の社會では、生産手段は意識的には、資本家の利潤の取得のためにのみ應用せられてゐるのであるが、無意識的には、これが社會に必要な生活資料を與へる手段となつてゐる。そこで白鼠がわき目も振らずに車を廻はしてゐるように、たゞ利潤を追求して夢中になつて生産の車を廻はしてゐる資本家らは、めい／＼に勝手氣儘の方向に動いてゐるに過ぎないかのようではあるが、一人々々の資本家のやつてゐることを全體として

ひつくるめて見るならば、これがやはり社會の生産の組織となつて居り、資本主義社會と名づける特殊な社會が、自然のうちから生活資料を取り出す特殊な仕組みになつてゐることを知るのである。

資本家は勞働力の買ひ手

資本家の目的は利潤であつて、ある定まつた品物の用途ではな

いのだから、その工場で造つてゐるものが軍艦であらうが、猿股であらうが、トランプであらうが、修身の教科書であらうが、一向かまはない。たゞメリヤスの機械では戦闘艦は造れない。そこで資本家が或る定まつた商品を生産しようとする時には、どんな種類の生産手段にも形を變へることのできる、貨幣といふ便利な形で持つてゐた資本で一定の生産手段——工場や機械や原料——を買入れる。市場の状況も、相當の利潤のあがる見込みがある。そこでいよくこの生産手段を運用して、商品の生産に着手する。

しかしこれだけでは、資本家は生産を始めることが出来ぬ。工場を開き、機械を運轉させ、原料を消費して商品に變へるためには、こうした生産の作業を實際にやる勞働者がなければ

ならぬ。

幸ひ資本主義の社會には、出來合ひの労働者が澤山ある。資本主義の社會では、社會全體のために生活の資料を取り出す生産手段は、少數の資本家の手に獨占せられて居り、社會の大多數者たる人々は、何らの生産手段をも所有して居らぬ。彼等は生産の作業をする力——労働する力——は持つてゐる。しかしこの労働力を應用して實際に労働し、實際に生産をいとなむべき工場も、機械も、原料もない。

そこで資本家は、これ等の無産者——即ちプロレタリアン——から、彼等自身が持つてゐたのでは何にもならない労働力を買入れて、その工場で働かせる。資本家は機械や原料を買入れたのと同じように、その資金の一部で労働力を買入れる。そして機械や原料を消耗するのと同じように、この労働力を工場で消耗する。

かように資本家の生産は、社會の生存に必要な品物を生産する過程ないしは作用として見る時には、自然の力と、生産手段と、労働力とがこれに關與する。けれども、これを社會内にお

ける人と人との關係として見る時には、生産手段の所有者たる資本家と、實際に生産の作業をやる労働者とがこれに關與するのである。

生産は資本家と労働者との協力か？ それでは資本主義社會における生産とは、資本家と

労働者との協力であるかと云へば、決してそうでない。資本家と労働者とは、生産といふ共同の目的のために協力してゐるものではなくて、資本家はたゞ労働力の買ひ手であり、労働者は労働力の賣り手である。資本家は利潤の收得といふ自分自身の目的を持ち、自分自身の算盤で自分自身の思ふような商品を、思ふような方法で生産する。資本家の生産に對しては、労働者はたゞ労働力の賣り手といふ關係に立つばかりであつて、何らの發言をする權利もない。それは機械の賣り手や原料の賣り手と同じであつて、棉花の賣り手は紡績資本家の事業に對して、固より發言の權利はない。したがつて棉花の賣り手をつかまへて、紡績資本家の協力者だといふ者はない。

けれども棉花の賣り手と労働力の賣り手との間には、一つの相異がある。棉の賣り手は、取

引が済んでしまへば、もはや資本家とは関係がない。棉花は紡績資本家の氣儘勝手に處分せられるが、棉花と賣り手とは別物である。勞働力の賣り手は、棉花を引き渡すように、その勞働力を一とまともに資本家に引き渡すわけにはゆかぬ。即ち勞働力の賣り手たる勞働者は、資本家がこの勞働力を消費する時間中は、自分自身で生産の行はれる現場——即ち工場——に出頭しなければならぬ。資本家は買ひ取つた棉花を氣儘勝手に處分するように、買ひ取つた勞働力をも氣儘勝手に處分する。そこで勞働の行はれる時間のうちは、資本家は單に勞働力を傷手氣儘に支配するばかりでなく、勞働者自身が、資本家に勝手氣儘に支配せられることとなる。

生産手段の所有者と勞働力の賣手との關係　かように資本主義の社會では、少數の資本家が生産手段を所有してゐる結果として、これ等の資本家が生産の仕事組織し、編制し、命令し、指揮する地位に立つ（だから今日は、實際に生産の作業をやる勞働者を生産者とは云はないで、資本家を生産者と呼んでゐる。即ち資本主義の社會では、生産は資本家のやつてゐるものと認められてゐる）。そして社會の大多數を占めるプロレタリアンは、生産の行程のうちに、

單なる勞働力の賣り手、命令を受けるもの、指揮せられるものとして、生産者たる資本家の指圖を受けて一定の勞働をする位置におかれてゐる。

かように生産手段の獨占者である極めて少數の人々が、利潤を收得する目的で生産を組織編制し、したがつてまた生産の行程を支配し、生産手段を所有しない社會の大多數の人々が、この指揮命令に従つて實際の生産勞働に従事する。これが即ち、現在、資本主義社會における生産組織の根本であり、神髓であり、核心であつて、資本主義社會のあらゆる制度と關係とは、いづれもこの神髓の現れであり、この根底の上に築かれた上層建築物であり、この核心のぐらりに肉づけられたものである。

もちろん資本主義の社會といへども、資本家と勞働者のみから出来上がつてゐるものではない。その他にも、生産と直接に關係のない仕事をしてゐる者が深山ある。ことに生産の行程には關係せぬが、生産せられた商品の流通分配といふ、資本主義社會における極めて重要な仕事に携はつて居り、従つて生産の行程とも密接な關係を持つてゐる多數の人々（商人）がある。かように資本主義社會の組織は、資本家と勞働者との關係だけで出来上がつてゐるものではない。けれども社會の組織組み立ての

根底、または社會の根本的の組織組み立ては、その社會が自然のうちから生活資料を取り出すための——即ち生産の——組織組み立てなのである。したがつて少數の資本家が生産手段を所有し、したがつてまた生産行程を指揮し、社會の大多數者が勞働力の賣り手としてその支配の下におかれるといふ生産の上の關係が、やがて資本主義社會における、一切の社會關係の根底となつてゐるものである。

第三講 階 級

階級とは何か　それ／＼の社會には、自然のうちから生活の資料を取り出すための、それ／＼の組織組み立てがある。これが即ち、その社會の生産の組織である。そしてこの組織組み立ては、それぞれの社會が全體としてどの程度に發達した生産の道具と技術を持つてゐるかによつて定まるものである。

魚が水の中に生み落されるように、人間は或る定まつた生産の組織組み立てのうちに生み落されるものである。従つて人々は、知らず知らずのうちに、その社會の生産の組織といふ大きな機械の、どこかの歯車の一つ——ないしは歯車の歯の一つ——となつて働らいてゐるものである。

吾々はこの生産組織の如何なる場所におかれてゐるか、言葉をかへて云へば、吾々は社會の

生産の組織組み立てのうちの、如何なる位置に配置せられて居り、したがつて社会の生産行程のうちのどんな役割に振り當てられてゐるかといふことによつて、吾々は社会のどの階級に屬してゐるか定まるものである。

かように階級とは、社会の生産の組織のうちに占める一定の位置と役割とを指すものであるが、この位置と役割とが違つてゐれば、従つてその人の収入の源泉も違つてくる。即ちその人がどんな方法により、どんな源泉から収入を得て生活してゐるかといふことは、やがてその人が、生産行程のうちに如何なる位置を占め、如何なる役割をしてゐるかを示してゐる。だから同じ方法同じ源泉から収入を得てゐる人々は、よしその収入の額には違ひがあつても、同一の階級に屬してゐるものである。

族籍と階級 數年前、ブルジョア政黨が貴族院の横暴に反對して起こした運動を、特權階級打破の運動と名づけたことがある。貴族は社会のうちの、或る特權を持つた少數者であることは間違ひない。しかし貴族は一つの族籍であつて、階級ではない。貴族が或る種の特權を持

つてゐるのは、法律や習慣によつて與へられてゐるから持つてゐるのであつて、社会の生産組織のうちに、一定の地位を占めてゐるためではない。彼等の特權は、封建社会の遺物である。彼等はこの時代おくれとなつた——したがつて存在の理由を失つた——特權を、たゞ保守的な法律によつて擁護せられてゐるからこそ、今も尙ほこれを維持してゐるのであつて、或る人が貴族であるか平民であるかといふことは、その人が社会の生産行程のうちの、どんな役割に振り當てられてゐるかといふことは、全く無關係な別個の事柄なのである。貴族といへども労働者——労働力の賣手——となることができる。平民といへども資本家——生産手段の獨占者——となることができる。かように貴族は身分ないしは族籍であつて、階級ではない。であるからこそ、ブルジョア政黨にも、この特權「階級」に對する反對の運動がなし得たのである。そこで「階級」といふ言葉を正確な意味に用ひるなら——即ち人々が、社会の生産の組織のうちに占めてゐる位置といふ意味に用ひたなら——資本主義の社会においては、生産手段を獨占的に所有してゐる階級以外には、ほんとの特權階級はないのである。

階級といふ言葉は、一般に、極めて不正確に使はれてゐる。「知識階級」といふ用語の如きもその一例であつて、知識の有る無しや知識の多い少いは、決して階級の區別ではない。階級といふ言葉を、ことさらにこゝにいふ意味に用ひたがるのは、資本主義の社會には、生産手段の所有者と無産者との二つの階級があるのだといふ事實を、曖昧にしようとする人々の慣用手段である。知識階級といふ言葉には、盲目階級、葬階級、ないしは禿頭階級などいふ言ひ表はし以上の意味はない。収入の金額によつて階級に別けるのも、精確な區別のしかたではない。一日五圓の賃銀を取る機械工は、一日八十錢で働らく紡績女工と同じく、無産階級に屬してゐる。これに反して小自作農は一ヶ年の収入僅かに三百圓であつても、無産階級には屬しない。

資本主義社會の階級——工業資本家と工業労働者

資本主義社會の生産には、二つの異つ

た役割をする人々が關與する。即ち第一には、生産手段を所有する人々である。彼等は生産に必要な機械や工場や原料を所有してゐるから、いついかなる商品もどれほど生産するかをきめる力を持つてゐる。またその資金のどれだけを機械や原料の買入れにあて、どれだけを労働力の買入れ——即ち労働者の雇入れにあてるかをも、決定する力を持つてゐる。即ち彼等は生産

の行程と労働とを編制し、これを指揮する力を持つてゐる。第二には、労働する力は持つてゐるが、何らの生産手段をも持たぬ人々がある。彼等は活きんがためには、生産手段の所有者にその労働力を賣らねばならぬ。彼等は前者の指揮命令を受け、その生産手段に労働を加へて商品を生産する。前者は即ち資本家階級であつて、後者はいふまでもなく無産階級、ないしは労働階級である。資本家階級は、生産手段に對しては所有者であり、労働者に對しては指揮者である。プロレタリアは、生産手段に對しては、實際にこれを使用する人であり、資本家に對しては、指揮命令せられる者である。資本家階級の収入の出所は利潤であつて、プロレタリアの収入の源泉は、筋肉又は頭腦の労働力に對して傭主から拂はれる代價である。資本家階級は社會の少數者であつて、プロレタリアは社會——工業の發達した社會——の多數を占めてゐる。資本家階級と無産階級とは、資本主義社會の生産行程における主たる階級である。従つてまた資本主義社會における二つの主たる階級であり、代表的の二大階級である。

社會の組織組み立ての基礎となつてゐるものは、生産の組織組み立てである。従つて生産行程の

ちにどんな役割をしてゐるか、生産の組織のうちの、どのような位置におかれてゐるかといふことがその社会の階級の分れる根本である。

社会の生産のうちに、どんな役割をしてゐるかによつて、収入を得る方法がちがつて来る。だから或る人が、どんな方法で何から収入を得て生活してゐるかを見れば、その人はどの階級に属してゐるか分かる。資本主義社会では、人々が収入を得る方法は、大ぼざつげに二つに區別することができ。即ち(一)資本ないしは財産(資本主義社会における主たる財産は、資本である)の所有から収入を得てゐるか——即ち利潤によつて生活してゐるか——(二)精神上肉體上の労働によつて生活してゐるかである。

しかるに利潤は、すべて生産行程で作られるものである。たとへば労働者が、一日二圓の賃銀で業主のために十時間働らくと假定する。この労働者は、一日十時間の労働時間のうち、たとへば最初の三時間の労働で原料や機械の價値を取り返へす。次の二時間で、賃銀として受取つただけの價値を取り返へす。そして最後の五時間の労働で作り出された新しい餘分の價値が、資本家の利潤となる。こゝして生産行程で作られた利潤は、一部分はこの生産行程に關與した資本家の懐にはいり、その残りは生産以外の行程——即ち流通行程など——に關與した資本家、即ち商業資本家や金貸業者などに分配されるものである。かように生産行程は、あらゆる種類の資本家の懐にはいる利潤が最初に作り出される場面であり、またその他の經濟上の行程は、すべて生産行程によつて支配せられてゐるものだ

から、収入の方法から見た階級の區別も、勢ひ生産行程において最もはつきりと見分けがつく。

そこでどちらの方面から見ても——即ち社会の生産組織のうちに占める人々の位置役割の上から見ても、収入を得る方法の上から見ても——生産行程における階級の區別が、その社会における代表的標本的な階級の區別である。従つてそれらの階級の階級意識も、生産行程との關係において、最も代表的標本的な發達をするのである。近代的な資本家や労働者の間に階級意識が眞つ先きに且つ最もよく發達し、これに反して學者だとか、教授だとか、その他の謂ゆる自由職業家といふような種類の社会層の間には、一般に階級意識が薄弱で、中間的中立的な思想が優勢をしめる傾向のあることは、この一事からのみ考へても、何らの不思議はない。

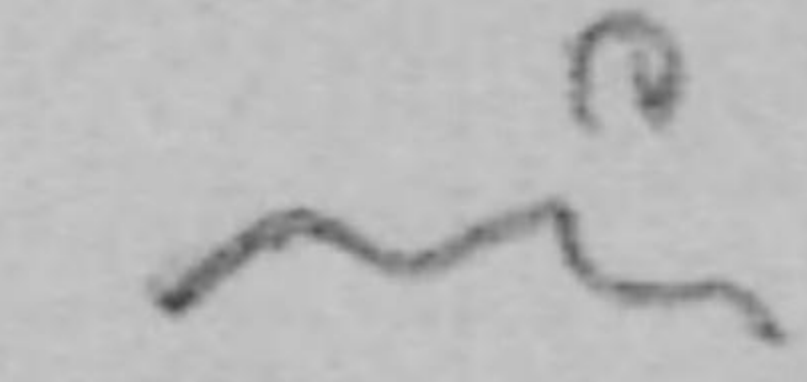
近代的な工業の資本家と近代的な工業の労働者とは、資本主義の社会における標本的な二大階級であり、言葉をかへていふならば、資本を所有すること、賃銀労働とは、資本主義社会において、人々が収入を得てゐる——従つて生活してゐる——標本的な二つの方法である。

資本主義社会における其他の社会層——ブルジョアジーの諸要素——もちろん資本主義の社会は、工業資本家と工業労働者ばかりで出来上がつてゐるわけではない。この二つの階級以外

ついでに、
三井、三菱

には、先づ第一には、商人といふ、數においてなかく大きな社會層がある。商人は工業資本家ではない。従て資本主義社會における標本的な資本家ではないが、同じく資本を所有してゐるために、生産行程で作られた利潤の配け前を得てゐる階級である。たとへば三井とか三菱などいふ大資本家は、工業資本家でもあるが、一方では、商業にも資本をおろしてゐるから、同時に商業資本家なのである。

もつとも三井三菱などの大資本家は、工業資本家であり、商業資本家であるばかりでなく、同時に金融資本家である。銀行資本は、直接に生産行程に携はるものではなく、商業資本と同じように、生産行程で労働者が作り出した利潤の配け前を貰つてゐるに過ぎないものではあるが、工業も商業も、金融業者から資金の融通を受ける。ことに一國の資本がますます少數の大金融業者の手に集中し、一方には、工業にも商業にも、ますます巨大な資本がゐるようになる。工業資本家も商人も、この金融業者のために喉元をおさへられる。銀行資本家は、いろいろの企業に資金を融通し、その代りにこれこの企業の管理に割り込んでゆき、いろいろの企業



をその直接間接の勢力下に集中する。こうして在來の銀行資本と工業資本とが融合して、同じ少數の強大な資本家の支配に統一せられたものが、即ち近代的な金融資本と名づけられるものであつて、この金融資本をその手に握つてゐる金融資本家こそ、生産と流通とに携はつてゐる資本家の群雄に君臨する眞實の王者の地位を占めるものとなる。

そのほかにも株券や債権の配當や利子、預金の利息などで生活してゐる社會層がある。彼等は直接には、生産行程にも流通行程にも携はつては居らぬが、その財産は或は工業家の手で、或は商業家の手で、或は銀行業者の手で、生産行程や流通行程に資本として用ひられ、その代償として、つまりは生産行程で造られた利潤の分配を受けてゐるものもある。家主の受ける家賃は、ある時は利潤の配け前であり、またある場合には、労働者の賃銀の中から支拂はれてゐるものではあるが、家主もまた、財産の所有から收入を得てゐる社會層である。

最後に、財産の所有によつて生活してゐる重要な社會層は、いふまでもなく地主である。近代的な工業の資本家から地主にいたるまでの色々の社會層は、決して精密に同じものでは

ない。けれどもこれ等の社會層は、いづれも財産（資本主義社會における標本的な財産は、資本である）の所有から収入を得て生活してゐるものであり、従つて社會の經濟組織のうちに、共通した位置を占めてゐるものである。いひかへれば、財産に對する——資本主義の社會では財産の主要部分は資本であるから、社會の生産に必要な一切の生産手段に對する——關係から見れば、これ等の社會層はいづれもみな、その所有者たる位地に立つてゐる。そこでこれ等の社會層をひつくるめて、資本主義社會における財産所有者階級——有産階級——が出来上がつてゐるのである。

無産勞働民　これと同じく近代的な工業の勞働者以外にも、直接に生産の勞働には従事してゐないが、精神上肉體上の勞働によつて生活してゐる多數の人々がある。商店員その他の商業上の使用人は、生産勞働をしてゐるものではない。彼等は、商業資本家が、生産行程で作られた利潤の配け前にあづかるために必要な勞働をやらされてゐるものである。そこで社會全體の上から見れば、彼等は利潤——生産手段の形でいままでにあつた價值の上に、勞働によつて

さらに新たに附け加へられた價值——を作り出してゐるものではないが、雇主たる商業資本家との關係の上から見れば、彼等の勞働によつて、初めて雇主の資本は利潤をあげてゐるものである。彼等は工業勞働者ではないが、同じく勞働する人であり、資本によつて搾取せられてゐる階級である。

資本主義社會の特徴の一つは、多かれ少なかれ「事務的」と名づけられる種類の仕事に従事する、廣い社會層のおこつた事である。彼等は普通に「頭腦勞働者」や「俸給生活者」などいふ名稱で、筋肉勞働者、ないしは賃銀勞働者と區別せられてゐるが、この區別は正確なものではない。如何なる筋肉勞働といへども、頭腦の働らきのいらぬものはない。これに反して、いはゆる「事務」と名づけられてゐる仕事のうちにも、筋肉勞働と少しも變らぬものが少なくない。否な、ある種の「事務」的な仕事になると、筋肉勞働以上に筋肉を働らせる必要のあるものすらも稀れでない。たとへば木型職工が、製圖によつて機械の模型を作る筋肉勞働は、事務員が傳票を帳簿に記入する頭腦勞働よりも、遙かに多くの智力を働かせる必要がある。のみ

ならず、頭腦労働者が人聞きのよいように「俸給」といふ袂紗に包んで受取る頭腦の労働の代金は、筋肉労働の賃銀に及ばぬ場合が少なくない。そしてこれまでは筋肉労働者にくらべて、俸給生活者が割のよい収入を得てゐたにもせよ、この差異はだんくなくなつてゐる。そこで俸給生活者は「事務」俸給」などいふ衣裳をぬいで裸にして見れば、あらゆる點から筋肉労働者と同じように、労働によつて生活してゐる社會層にほかならぬ。

たゞ上級の俸給生活者になると、同じく資本家に雇傭せられてゐるものではあるが、資本家自身の管理任務を委任され、資本家に代つて下級俸給者や筋肉労働者を指揮命令する仕事を擔當するものが少なくない。従つてまた、彼等の俸給には労働に對する代金以外に、資本家の利潤の配け前が加はつてゐる。頭腦労働者ないしは俸給生活者のうちには、こうした社會層に屬する分子がある。そして同じく俸給生活者といふ名前によつて、かような社會層にながつてゐるために、下級俸給者にいたるまで、労働民としての階級意識の發達を妨げられてゐるのである。

俸給生活者の一種ではあるが、生産の行程にも流通の行程にも直接關係がなく、同じく雇傭はせられてゐるが、直接に資本家から雇傭せられて居らぬ社會層がある。たとへば官吏、公吏、教員などである。彼等の勤務のうちには、直接に生産と關聯したものが無いではないが、經濟生活とは、全然、直接の關係のないものが多數を占めてゐる。この種の勤務は、資本主義社會の消費に屬してゐる。即ちこれ等の勤務は、資本主義社會を維持するために、なくてはならぬ出費である。たとへば教育の仕事は、資本主義の經濟制度とは何らの關係もないかのように見へるが、現在の資本主義社會を維持し、そして差し障りなくこれを運轉してゆくためには或る一定の内容をもつた、或る一定の度合ひの教育が、必要缺くべからざる條件なのである。そこで政府なり町村なりが教員の勤務に對して支拂つてゐる俸給は、資本主義社會にとつて、必要缺くべからざる出費を意味してゐる。

かようにこの種の俸給生活者の勤務ないしは勞務は、直接には、資本家の利潤と關聯して居らぬが、労働ないしは勤務をもつて生活の唯一の方法とする點では、彼等もまた労働民ないし

は勤勞民に屬してゐる。また彼等の俸給は、資本主義のもとにおいては、勢ひ生産行程の資本に雇傭せられてゐる俸給生活者の俸給によつて支配せられるものであるから、同じく搾取を蒙つてゐるものといふことができる。

しかしながらこの種の社會層は、資本主義社會における標本的な搾取の行はれる生産行程とは、あまりに懸けはなれてゐるために、また一般雇傭生活者の場合と同じように、その上層は支配階級の支配事務にあづかつてゐるために、勞働民としての階級意識の發達が防げられてゐるばかりでなく、支配階級の意識をもつてゐる場合さへも少なくない。

以上の諸要素は、いづれも資本主義の社會組織のうちにあつて、財産に對する關係においても共通の位置におかれてゐる社會層であり、また精神上肉體上の勞働力以外には、收入を得るための何らの手段をも持たぬといふ點でも、共通の立場にある社會層である。けれども標本的なブルジョアジーと標本的なプロレタリアとが、支配と被支配、搾取と被搾取者の關係をもつて、直接に對立してゐる生産行程を遠ぼさなければ遠ざかるほど、資本主義經濟組織のうちに占

めてゐるこれ等の要素の位置は曖昧になり、搾取と被搾取との關係は間接的となり、近代的な無産者としての特徴は、不鮮明になつてくる。したがつてプロレタリアとしての階級意識は漸次に淡くなり、これに代つて中間階級的の意識が濃くなり、最も端の方になると、却つて濃厚に支配階級の意識に染まつてゐる。

地主とあい對して、勞働民の大衆のうちに極めて重要な要素をなしてゐるものは、農民（小作農）ないし貧農である。

小ブルジョア中間的の階級 同じく勞働または勤勞によつて生活してゐる社會層のうちでも、生産行程から遠ざかるに従つて、近代的なプロレタリアの性質がだん／＼稀薄になつてくる。それと同様に、財産の所有によつて生活してゐる社會層の方でも、一つには生産行程から離れるにしたがつて、また一つには大きな財産の所有者から、漸次、小さいな財産の所有者に移るにしたがつて、標本的なブルジョアジーの性質は、だん／＼影がうすくなる。そこで双方の融け合つたところに、勢ひ中間的な社會層が出來上ることとなる。

同じく財産の所有者であつても、大工業主と中小の工業主、大商人と中流以下の商人、地主と小地主とは、大に立場がちがつてゐる。後者は直接間接に前者に支配され、その厭迫を感じ、その競争のために、たへず現在の地位から蹴落とされる危険と不安にさらされてゐる。そこで政黨の發達した國々では、金融資本や大工業主や大地主の利害を代表した政黨のほか、これ等の小ブルジョアジーの利害を代表する政黨が並立してゐる場合が少なくない。

小ブルジョアジーをさらに下屬に降つてゆくと、半ばは財産の所有により、半ばは労働によつて生活してゐる眞實に中間的な社會層がある。たとへば工場地帯の附近には、二人か三人の職人や徒弟を相手に、親方自身も一緒に働らいてゐる小さな職場がある。これ等の親方は、小さいながらも生産手段の持主であつて、獨立の計算によつて事業を經營してゆく獨立の企業者にはちがひない。しかしその獨立は、ほんの外観だけの獨立であつて、實際には、大工場大工業の附屬物に過ぎないばかりでなく、自分自身で労働して、僅かに企業を維持してゐるのである。彼等は資本家の階級から成り下がつたものでなければ、多くは「かいしようのある」熟練

労働者の成り上がつたものであるが、まだ（恐らくは遂に）ほんとうの資本家に成りますことができぬ。場末に軒をならべてゐる小商人や、辛うじて耕やすに足るか足らぬかの地面を持つてゐる自作農なども、これと同じ社會層に屬してゐる。

この社會層に屬してゐる要素は（親方職人にせよ、小商人にせよ、小自作農にせよ）大體において、いづれも資本主義以前の生産制度の遺物であつて、したがつて資本主義社會における標本的な階級とは、はるかに隔たつて居り、したがつて資本主義社會における標本的な階級にくらべて見れば、多かれ少なかれ中間的な性質を帯びてゐる。いはゆる自由職業に従事してゐる人々のうちにも、この社會層に屬するものが少なくない。

財産の所有によつて生活してゐる階級の、かりに中流以下を小ブルジョアジーと名づけるなら、以上に述べた諸要素は、ブルジョアジーとプロレタリアとの間にある中間的の階級といふことができる。けれども實際には、小ブルジョアは多かれ少なかれ中間階級的であり、中間階級は多かれ少なかれ小ブルジョア的である。上からは反動主義化した大資本の勢力によつて壓

しつけられ、下からはプロレタリアの新興勢力の威迫を受け、その間に右往左往して、或る時はプロレタリアの力を借りて上からの壓迫を免がれようとし、或る時は大資本の従僕となつて獅子の配け前にあづからうとする點において、兩者は同じく中間的である。たえず破滅の危険と不安とにさらされてゐる結果として、現在の地位にがちりつき、僅かに取り留めてゐるものを失ふまいとする執着においても、またかつて持つてゐた自由と獨立との幻影にとらはれて、反集團主義的個人主義的な心理をもつてゐる點でも、兩者は均しく小ブルジョアの的である。要するにこの社會層は、資本主義の社會における最も安定のない社會層であつて、その一部はたえず無産者の群に陥落してゆくと同時に、上からは競争によつて打ち碎かれたブルジョアジの破片が、たえまなく落ちこんで来る。こうした性質をもつてゐる結果として、この社會層からは、多數のブルジョアジの傭兵を出だしてゐると共に、プロレタリアの陣營に來り投ずるものも少なくない。また各國におけるファシズムが、主としてこの社會層から勢力をかり集めてゐることをも、忘れてはならぬ。

支配階級の寄生層 生産行程でも流通行程でも、高級の俸給生活者は、資本家に代つて支配事務に當つてゐる。彼等は資本家階級と利害を同じくするから、したがつて資本家階級と同じ心理をもつてゐる。また今日の社會には、ブルジョアの個人的の必要のために使はれてゐる者や、ブルジョアの精神上肉體上の享樂に奉仕してゐる者が澤山ある。彼等は、多くは小ブルジョアや無産階級の出身ではあるが、ブルジョアジの利潤によつて飼養され、ブルジョアジに寄生してブルジョア風に生活してゐるものであるから、従つてブルジョアジの階級意識に支配せられてゐる。

或る種の學者、教授、宗教家、藝術家、新聞記者、その他のブルジョア知識分子は、一面においては、ブルジョアジの享樂に奉仕してゐるものであつて、同時に民衆を思想的に支配するブルジョアジの精神的支配の仕事をやる役目によつて生活してゐるものである。(ブルジョアジの精神的支配に反抗して、プロレタリアの間には、プロレタリア知識分子を發生する。)最後に、ブルジョアジの支配を維持するためには、 $\times \times$ の $\times \times \times$ を支配してゐる一群の人

資本主義の発展と階級闘争の歴史

々、職業的の××、×××、××、××、××などがある。彼等はいろくの階級の間から特に拔擢され、直接にブルジョアジーの支配任務を擔當し、民衆の××を×××、ブルジョアジーの×××維持することによつて、その搾取を擁護する重要な部署につかきめられてゐるところの、いはゞブルジョアジーの近衛兵である。

資本主義の社會における諸階級の性質

人間と松の木との場合には、いづれが動物でいつれが植物であるかは、一見して明らかであるが、動物界と植物界との境目には、動物が植物か分らぬような生物がある。そのように岩崎男爵と三菱造船所の職工とをくらべれば、ブルジョアジーとプロレタリアの區別は截然としてゐるが、この代表的なブルジョアとプロレタリアとの間には、いろくの段階があり、ことにこの兩階級の接觸するあたりには、多かれ少なかれ中間的な性質を帯びた社會層がある。吾々は時としては、この社會層をひつくるめて、その性質にもとづいて、小ブルジョアジーと呼んでゐることがある。

資本主義が發達して、現在の段階——金融資本の時代、帝國主義の時代——になると、資本

主義の經濟は、一方においては、ますます世界的になると同時に、他方においては、この世界的な資本主義經濟のうちにあつて、國々の資本の利害はますます激烈に對立して、その間に生死の争ひが始まつてくる。強大な金融資本の寡頭的支配に歸した資本主義強國は、原料や燃料の如き資源と、この商品の市場とを求めて互いに鬭争し、一方には、世界的な大戦争の危険がたえず世界を脅やかし、他方には、これらの資本主義強國の資本の植民地にされた被抑服民族の反抗がますます加はつてくる。

それと同時に一國々々の内部においては、内國資本は外國資本と支配を争ふ必要から、これまで以上に労働大衆を搾取しなければならなくなり、従つて資本家と労働者との間の利害の對立はますます激烈になり、いろくの形の鬭争となつて現はれる。

また商工業と商工業資本、ことに金融資本の壓迫は、資本主義の發達につれて、地主と土地資本の上ますます加はつてくる。この壓迫をはね返へす力のない地主階級は、勢ひ農民の生活を引き下げ、土地資本と地主の受けるこの壓迫を農民に轉嫁することによつて、一條の血路

を切り開こうとする。農民はこの地主階級からの壓迫を蒙るばかりでなく、直接にも商業資本と金融資本から壓迫される。そこで地主と農民との間の利害の對立はますます激烈になり、こゝでもまた、いろ／＼の形の闘争となつて現はれてくる。

この闘争が進展すればするほど、そして労働者や農民の組織が有力になり、その意識が發達し、その抵抗の力が強大になればなるほど、資本家と地主はこの抵抗を打ち破るために、いよ／＼ますます露骨にかつ直接に、支配階級として持つてゐる政治權力の行使に訴へるようになる。

かように資本主義が現在の發達の段階に達すると、國際的にも國內的にも、資本主義は、本來そのうちに持つて生まれてゐる自壊作用を現はしてくる。

資本主義がこの段階にはいるに従つて、かつては封建制度を打破して新しい經濟組織を建設する革命的な階級だつたブルジョア階級は、滅びゆく臭骸に取りすがつてゐる人のように、たゞ／＼事物の現狀を維持しようとする純然たる保守的・反動的な階級となる。

これに反して眞實の生産力たるプロレタリアは、社會の進化と發展とを代表し、新しい社會生活の理想とその歴史的の必然とを代表した、進歩的・革命的な階級に成長する。

それと同時に、ブルジョア階級の内部にあつても、大資本と小資本、大地主と小農との利害は、だん／＼離れてくる。従つて小ブルジョア階級の安定のない階級の特質は、ますます著しく現はれ、絶えず二つの主要階級の勢力の間を浮動してゐる階級となるのである。

階級の組織 資本家の間には、たとへば大日本紡績聯合會や船主同盟や、その他の同業組合などがある。更に一步を進めた英國の工業主聯盟の如きものもある。商業會議所がある。帝國農會がある。地主組合があり、全國地主協會がある。これ等のものは、いづれも資本家階級の一部分ないしは全體の利害を擁護するために作られてゐる公然の組織であるが、そのほかにも陰然の組織がある。

次には、階級的な性質を隠してゐる、ブルジョアの組織がある。たとへば×××××、×××××、×××××、各種の反動團體などの如きは、いづれもこの種の組織であつて、これ等の

うちには、ブルジョアジーが民衆を思想的に支配するための組織もあるし、反動思想と軍國主義的思想によつて國民——特に青年——を訓練するための組織もあり、特に大ブルジョアジーが小ブルジョアジーを統御するための組織もあり、たとへば英國の供給維持團のように、一般公衆の利害を擁護するといふ名目のもとに、特に労働者の罷業に備へたものもあり、イタリアのファシストやドイツのファシスト軍事同盟のように、ブルジョアジーの擁護を目的とする武装した團體すらもある（その他英國のファシスト團、米國の在郷軍人團など）。

ブルジョアジーが民衆を思想的・精神的に支配するための最も有力な、最も根底の深い組織は、 XX である。宗教もまた同一の職分を持つてゐる。民衆の意見を左右する最も有力な道具は、ブルジョアの言論機關である。あらゆる種類の娛樂機關（カフェー、キネマなど）競技機關、賣淫制度、アルコール飲料などもまたブルジョアジーのために、民衆の注意を轉換し、その闘争の力をそぐ有効な役割を演じてゐる。

しかしながらブルジョアジー全體としての力を組織した眞實の階級的の組織は XX である。

$XXXXXXXXXXXX$ 、支配階級としてのブルジョアジーの階級的の組織であつて、 XX はブルジョア $XXXXXXXXXXXX$ はプロレタリアと労働農民との經濟上の利害を擁護する主たる組織は、労働組合と農民組合である。消費組合もこの組織の一つであるが、わが國では、無産階級的な消費組合運動は、ほとんどまだ發達して居らぬ。

政黨とは、階級の政治勢力を組織したものである。如何なる場合にも、政黨は一つの階級の成員全體——その大多數をさへも——を組織したものでなくてはなくて、むしろ比較的少數な精銳分子の結合であるが、階級の利害を代表し、階級を政治的に指導するものは政黨である。

たとへば現在のドイツでは、國民黨、人民黨、中央黨などはブルジョアジーを代表し、社會民主黨は下層小ブルジョアと、小ブルジョアの思想的支配のもとにある労働者とを代表し、 XX は $XXXXXXXX$ プロレタリアを代表する政黨である。また英國では、保守黨は大資本の階級を代表し、労働黨は労働階級のあらゆる要素を代表する。そして本來のブルジョア黨だつた自由黨は

この二つの主要階級の勢力の間にはさまれて漸次に分解作用を受け、その一部分は大資本家黨たる保守黨に吸収され、他の一部分は、ますます純粹な小ブルジョア黨に變化すると同時に、労働黨そのもの内部にも分化の作用が起こり、その右端は次第に小ブルジョア黨化してこれと接近しつゝある。英國においても、 $\times \times \times$ プロレタリアを代表する眞實の前衛的黨派は $\times \times$ であるが、労働大衆の多數は、大體において、なほ小ブルジョアの指導の下にある。それと同時に、英國の労働階級が、小ブルジョアの指導から、急速に離れつゝあることも事實である。さき頃の總同盟罷業にあたり、労働黨には、プロレタリアを政治的に指導する力のないことが、決定的に證據だてられた。英國の労働者がこの經驗の教訓を消化にしたがつて、右の作用は、一そう急速に促進せられるにちがひない。

第四講 階級闘争

階級闘争 資本主義が青年期壯年期をへて、いよいよ老年期に達すると、資本主義のもとに發達した生産力は、資本主義の生産關係といふ入れ物の中では、もはやそれ以上には伸びることができなくなる。資本家階級はこの舊るい生産關係を維持しようとする階級であつて、労働階級は、この障害物を突破して伸びようとする、社會の生産力を代表した階級である。かように資本主義が衰退期に入ると、資本家階級は、たゞ歴史的任務をすませた。舊るい事物を代表する以外の何ものでもない力となり、労働階級は、これに代らうとする新しい事物を代表した力となる。そこでこの二つの階級の勢力は、ちやうど馬車の前と後ろとに、反對の方向にむけてつけられた二頭の馬のように、一方の勢力は、人間の歴史といふ車（または社會の進化といふ車）を前方に廻はそうとし、いま一つの勢力は、これを後ろの方に引き戻そうと

する。したがつてこの二つの勢力は、**社会生活のいたる所において、あらゆる形で正面から對立し衝突する。**

階級と階級との間のかような對立衝突が、即ち階級闘争である。

血族關係で集つてゐた原始時代の共産社會が崩解して、搾取者と被搾取者、支配者と被支配者とから成り立つ階級社會になると、社會を前の方に進めようとする力も、これを現狀に引きとめようとする力も、おの／＼或る階級がこれを代表することになる。資本主義の社會では、この二つの勢力を代表する主たる階級は、資本家階級とプロレタリアである。資本主義以前のいかなる社會の階級でも、自分が如何なる社會勢力を代表して如何なる歴史的役割をしてゐるかといふことを、充分に（多くの場合には全く）意識してゐなかつた。言ひかへれば、過去の社會における階級は、その歴史的任務を明白に意識してゐなかつた。この明白な意識を持つていたものは、資本主義社會における代表的な階級のみである。したがつて資本主義社會になつて、初めて階級闘争は最も發展した形を取り、意識的な闘争となり、眞實の意味での階級闘争に發展したのである。資本主義社會の初年には、資本家階級もプロレタリアも、自分が代表してゐる力の性質を、まだ明白に意識してゐなかつた。したがつて當時は、資本家と労働者との間に利害の衝突はあつたが、階級闘争は多かれ少なかれ、尙ほ原始的、萌芽的、自然的な形で存したに過ぎなかつた。

資本家の利害と労働者の利害 資本主義が青年期壯年期にあつた時代——即ち資本主義が舊

るい生産組織に取つて代はつた（または取つて代はりつゝある）新しい生産の組織として、激進たる勢ひで生長し、その生長と共に、今まで舊い組織の外殻の中におしこめられてゐた社會の生産力を伸ばしてゐた時代——には、資本家階級はまさにこの新しい力を代表した階級であつて、従つて資本と労働との二つの階級の勢力は、いま云つたような意味では、まだ正面から對立衝突してゐなかつた。少なくとも、どちらの階級も、自分がそうした社會勢力を代表し、そうした歴史的役割を演じてゐるものだといふことを、意識してゐなかつた。

のみならず資本主義がなほ生長の登り坂を辿つて居り、その發達の一步ごとに、社會の生産力を増進し、國內に莫大な富を積み重さねてゐた時代には、労働者もまた、多かれ少なかれこの繁榮の恩恵に浴することができた。言ひかへれば、労働者の境遇は、よし資本家が肥つてゆくと同じ割合ではよくならぬにしても、ともかく改善されてゐたのである。

しかしそれにも拘らず、資本家と労働者とは、すでにこの時代においても、根本的には利害

が異つてゐた。

労働者は生産行程において、新しい価値を作る階級であつて、資本家は労働者の作った価値を、利潤として取得する階級である。労働者が工場において、一日の労働によつて生産した商品の価値は、その中から原料や機械の費へを引き去り、その労働者の一日の賃銀を引き去つても、尙ほそのあとに、何ほどか残る。この「何ほどか」を、資本家は利潤として懐に入れる。この「何ほどか」のために、資本家は労働者を備ひ入れて労働をさせる。資本家の目的は、この「何ほどか」を労働者の労働のなから搾り取ることなのである。

そこで資本家の利益は、この「何ほどか」をなるべく大きくすることである。そしてこの「何ほどか」を大きくする方法は、第一には労働者に支拂ふ賃銀を少なくすることである。第二には工場の設備やその他のような、賃銀以外の、労働者に労働をやらせるための費用を少なくし、第三には同じ賃銀を支拂つて、少しでも長く働らかせることである。

これに反して労働者の利益は、第一には賃銀の増額であり、第二には、その他の労働条件の改善であり、第三には、同じ賃銀を受けて、短い時間働らくことである。だから資本家と労働者との経済上の利害は正反對である。

共同利害の意識 資本家と労働者とは、一人々々について一つ一つの場合を具體的に考へて見ても、両者はいつでも例外なく、搾取する人と搾取される人であつて、その利害はいつでも相反してゐる。そこで一人々々の儲主たる資本家と一人々々の労働者との間にも、こうした経済上の利害の對立にもとづく軋轢と、衝突と、闘争とが絶えず起こつてくる。

しかしこの利害は、決して一人々々の特殊な利害でないことがすぐ分かる。一つの工場なり職場なりに働らいてゐる何十人、或は何百人、何千人の労働者の間には、こまかな點では、各人に特別な利害があるにもせよ、儲主たる一人の資本家を向うに廻はして考へた場合には、何十人あつても何百人あつても、同じく搾取される人だといふ點では、同じ利害をもつてゐる。即ち搾取せられる人としての利害は、一人々々の特別の利害ではなくて、同じ搾取者の搾取を受けてゐる何十人、何百人の共通の利害である。

労働者のこうした共通の利害は、同じ工場なり職場なりで搾取を受けてゐる一團の労働者が共通の搾取者たる傭主の利害と相対した時、最も容易に知ることが出来る。なかんづく、同じ職業部門に働らいてゐる労働者の間では、一そう痛切に共通の利害が感ぜられる。同じ資本の搾取を受けて同じ工場に働らいてゐても、職業部門がかけはなれてゐる場合には、却つて別々の地域と別々の工場に働らいてゐる同一職業の労働者の間に、まづ共通の利害が感ぜられる資本主義の初年にあつて、機械の利用が今日ほどに進歩して居らず、従つて労働者の熟練が今日以上に重要だつた時代には、いろいろな職業部門の労働が、今日ほどに平等化せられてゐなかつた。かような時代には、勢ひ同一職業の労働者の間に、利害の共通が最も強く感ぜられたのである。

同一職業の労働者、同一工場の労働者には、共通の利害があるといふ意識は、さらに一步を進めて同一地方のすべての労働者、さらに進んでは一國におけるすべての労働者——労働者階級——の間には、共通の利害があるといふ意識に發達する。これがいま一步を進めると、全世界

界の労働者階級の間には、共通の利害があるといふ、國際的な階級意識となるのである。

かように労働者の共通利害の意識を、一つの職業一つの工場から、全國、全世界にまで擴大させ發展させてゆくものは、資本主義そのものゝ發達と、これに應じた労働者の經驗——なかんづく闘争の經驗——と、この闘争の中から、この闘争の一部として發達する無産階級運動の理論とにほかならぬ。さきにも云つたように、機械の進歩は、労働者の熟練の重要さをだんだん小さくし、いろいろの職業部門の労働の間の差異を少なくし、或は全く消滅させる。また大資本と大企業が發達するにつれ、同一の資本が數個の工場、ないしは數地方の工場で労働を搾取するようになる。従つて、多くの工場多くの地方に擴がつてゐるますます多數の労働者が、同じ反對利害にぶつかるために、共通の利害を意識するようになる。

さらに會社組織が發達して企業がますます大規模になると、労働者を搾取してゐる資本家は小企業や小工場の雇主の場合のような、何の何兵衛といふ個人的な性質をだん／＼失つてくる。そして労働者は、自分は直接に、何の何兵衛に搾取せられるかは、それほど明白には分らな

いで、却つて抽象的な「資本家」といふものが、自分を搾取してゐることを痛感する。何の何兵衛といふ個人的な性質からぬけ出したこの抽象的な「資本家」を集めると、すぐさま「資本家階級」といふ考へになる。労働者は「資本家階級」といふ概念を見出した時、はじめて「労働階級」といふ概念を発見する。資本家階級には共通の利害のあることを知つた時、労働者は初めて、労働階級の経済上の利害が、階級的に共通してゐることを知るのである。

もちろん資本家は、かように労働者の間に、共通利害の觀念の發達するのを、黙つて見物してゐる筈はない。いな多くの場合に、資本家は労働者よりも、階級的に目醒めて居り、資本家階級の階級意識は、労働階級の階級意識よりも、はるかに進んでゐる。そこで資本と労働との経済上の利害の對立に根ざした闘争が進むにつれ、資本家はいつでも、労働者に一步をさきんじて、階級的に團結して労働者の力に當るのが常である。即ち労働者の自衛の力と對抗の力が強まるに従つて、同一地方の資本家、同一産業の資本家、同一系統の資本家が聯合團結してこれに當るばかりでなく、いままでは内輪喧嘩をしてゐた全國の資本家、いな、全世界の資本家

19750 11.6
現在より同じ

が、労働者の力に對峙した瞬間には、たちまちにして一致團結する。

こうした資本家そのものゝ行動と、これに應ずる必要とによつて、労働者は自分の前に立ち塞ががつてゐるものは、傭主何の何兵衛ではなくて、一個の「資本家階級」だといふことを學習する。そして資本家階級の利害が一丸となつてぶつかつて來た時に、労働者は最も明白に、労働階級の階級としての利害を意識するのである。

のみならず資本家階級は、支配階級としての自分自身の力の所在を、本能的にもよく知つてゐる。であるから資本家階級は、労働階級との闘争に當つては、ほとんど本能的に政治上の權力に依頼する。彼等は労働階級に先きだつて、ほとんど本能的に、政治上の權力を階級闘争に使用する。ことに階級的に目醒めた資本家階級は、意識的、計畫的、組織的にこの力をもつて労働階級に對抗する。彼等は國內的にばかりでなく、各國の資本家階級が團結して、國際的にも政治權力をこの闘争に利用するのである。

また階級的に目醒めた資本家階級は、一般大衆を精神的に支配するいろ／＼の制度と施設――

—あらゆる思想上教化上の制度と施設——をも、國內的にも國際的にも、意識的計画的にこの闘争に使用する。

階級闘争の發展 かように労働者が、一日の賃銀を僅か十銭増額し、労働時間を三十分短縮し、危険防止の設備を改善し、工場の採光をよくし、休憩時間を長くし、備主をして食堂を設けさせ、便所を清潔にさせることなどのような、ほんの僅かな部分的な改善、日常當面直接の經濟上の利益を資本家から獲得し、または資本家の侵害に對して、こうした經濟上の利益を擁護しようとする日々の闘争を發展せしめてゆくと、遂には全資本家の階級としての經濟上の利益と、全労働者の階級としての經濟上の利益との對立衝突を意味する闘争と、この闘争に照應した階級的の意識に到達するのである。

百萬圓は一圓の百萬倍である。しかし同時にまた、一圓を百萬倍した以上の何物かである。一圓の金は資本として、労働の搾取に用ひることはできぬ。けれどもこの一圓を十倍し百倍し千倍して一百萬圓になると、初めて有力な資本となる。即ち分量の變化が、その性質を變化し

たのである。直接當面の經濟上の利害にもとづく資本家と労働者の間の日常の闘争とその意識も、またこの通りであつて、一人々々の資本家と労働者との偶發的な衝突が、一工場または一職業の労働者と備主との間の日常不斷の争闘となり、一地方の資本家と労働者との闘争となり、一産業全體の資本家と労働者との闘争となり、一國ないしは全世界の資本家と労働者との間の闘争に發展してくると、闘争の分量の上のかような擴大は、闘争の性質をも一變する。即ち日常當面の經濟上の利害の争ひが擴大するに従つて、それはもはや純然たる經濟上の利害の闘争ではなくなつてくる。その通りに、一職業または一職場の労働者の共通利害の意識がだん／＼擴大して、全労働者の共通利害の意識に到達する頃には、この意識の性質も變つてくる。即ちこの意識は、純然たる經濟上の利害を均しくするといふ意識以上の意識となる。言葉をかへて云へば、それは一日の賃銀十銭の増額、労働時間三十分の短縮、食堂の設備、便所の掃除等々々々を單に合計したものではなく、それ以上の或るものに對する意識となるのである。

闘争の分量が擴大すれば、これに伴つて闘争の性質も變化する。言葉をかへて云へば、闘争の擴大

に伴うて、階級意識も擴大する。けれども闘争の擴大が常にその原因であつて、階級意識の擴大が常にその結果であると考へてはならぬ。闘争の發展と階級意識の發展とは、互いに作用し反作用しつゝ、初めて發展するものである。であるから、闘争が擴大すれば闘争の性質も變化すると云ひ得られるように、階級意識が擴大すれば（即ち闘争の性質が變化すれば）、闘争が擴大するともいふことができ。言ひかへれば、階級意識の擴大に伴はぬでは、階級闘争は發展することはできぬ。

階級意識は、労働者自身の経験——特に闘争の経験——なくしては發達せぬ。けれどもそれと同時に、階級意識は、たゞ経験のみによつて、必然に發展するものではない、労働者の経験はプロレタリアの×××理論によつて、たえずこれを整理し、統一し、正しく理解されなければならぬ。プロレタリアの×××理論は、労働階級の経験のうちから生れたものであると同時に、この経験を指導する力である。當面の經濟上の利害から出發した闘争の経験は、この理論の濾過器を通過して、初めて眞實の階級意識に淨化せられるものである。

そこでプロレタリアの完全な解放を目的とする階級闘争とその意識とは、工場や職場における當面の經濟上の利害にもとづく闘争に出發するといふことは、かような經濟上の部分的な闘争は、全階級の意義のある闘争にまで、如何なる場合にも、如何なる條件の下にでも、必然に發展するといふ意味ではない。現に日常當面の労働條件の改善を目的とする闘争とその組織とが、全く固定してそれ以上に少しも發展せぬばかりでなく、却つて階級闘争の上に保守的反動的な役割をするものとなつて

ゐる實例に乏しくない（たとへばアメリカ労働聯合會とその運動など）。

それと同時に、かような日常當面の經濟上の利害にもとづく闘争——謂ゆる自然發生的な闘争——の意義を過少視することも誤つてゐる。この種の論者は、労働者の『自然發生的な經濟闘争』は、『×××理論』と名づけるそれとは全くの別物たる外來物によつて置き替へ、ないしは全く異つた性質の『×××理論』を接穂^{つぼ}することによつてのみ、労働者をして初めて眞實の階級意識と階級闘争とに到達せしめるものだと言張する。けれども『自然發生的な闘争』に『×××理論』を接穂して、それがよく活着するのは、この接穂と枯木との間に、離なすべからざる緊密な關係があり、この二つのもの間に共通の性質、ないしはその一方が他のものに發展し得る性質のある證據である。もし『自然發生的な闘争』にかような特殊の性質と意義とがないならば、彼等はその『×××理論』をことさらに労働者に向つて説くよりも、むしろ労働者よりも一般に知見の廣いブルジョア・インテリゲンチアに向つて説教すべきである。資本主義社會における諸階級のうちに、特にプロレタリアのみに、この『×××理論』を受け容れる資質があるのは、要するにプロレタリアの、この『自然發生的』な闘争性のために外ならぬ。これは謂ゆる『自然發生的な闘争』と『×××理論』との間には、離るべからざる關係があり、前者のうちに、後者に發展すべき性質のあることを意味するものであつて、それは全く縁もゆかりもない外來物を外から持つてきて置き替へるのではなくて、闘争とその意識の發展なのである。

資本主義社會の構造のうちにおいては、プロレタリアは必然に、おのづからに、資本家と闘争するにいたるような社會的位置におかれてあるといふ事實を外にしては、プロレタリアがその他の階級と根本的に異つてゐる何らの特質もないのである。これは言葉をかへていへば、『自然發生的な闘争性』を取り去つたなら、プロレタリアには、その他の階級と異つた特殊な歴史的使命を負はしめられる何らの素質もないといふことを意味してゐる。そこでもしプロレタリアの解放運動と其理論とが、この『自然發生的な闘争』にもとづき、この『自然發生的な闘争』に訴へ、そこから動力を引き出してくる必要のないものであつたなら、それは勢ひ社會のあらゆる社會層に訴へ、その正しい理智と正しい判断とに訴へる運動であつて、精密にマルクス以前の空想的社會主義と性質を均しくするものである。労働組合の經濟闘争を『自然發生的な闘争』としてその意義を無視したり、政治闘争の重要さに眩惑されて、ひたすらにこれを組合に押しつけ、組合の經濟闘争に代へようとしたり、無産階級の大衆的黨派と前衛黨との任務を混同したりするいろ／＼の幼稚な誤謬の一半は、謂ゆる『自然發生的な闘争』と『X×X理論』とを『辯證法的に把握』し、その發展において理解することができないで、これを機械的に對立させる誤謬にもとづいてゐる。

かように日常當面の經濟上の利害にもとづく資本家と労働者との闘争と、これに照應する共

通利害の意識とが發展すると、この講話の初めに述べた、資本家階級と労働階級との歴史的任務と、びつたり出逢ふことになる。即ち資本家階級も労働階級も、もはや單純に、直接眼前の經濟上の利害をのみ意識して働らいてゐるものではなくて、資本主義社會における一定の歴史的役割を演じてゐる社會的勢力として、この役割を意識して、その爲めに闘ひつゝある階級となるのである。

そこで初めて資本家と労働者との間の闘争は、最も發展した形における——ないしは眞實の意味においての——階級闘争となるのである。

私はかつて何かの論文のうちで、次のような一節を讀んだことがある——「或る労働組合の一幹部は、吾々は日和見主義だと非難されながら、ぞく／＼組合の闘士を監獄に送らねばならぬのは、大なる苦痛である」と嗟嘆して居つた……」。(私の見るところでは、これは「嗟嘆」ではなくて一種の誇りではなかつたかと思ふ。即ちこの嗟嘆のなかには、吾々を日和見主義者とあざける人々は、吾々の戰闘的な行動を見よ、といふ會心の微笑がたゞよふてゐる)。そこでその論文の筆者は、この皮肉な事實を次の如く解釋した——即ち「日本の労働組合においては、その懐抱する理論が決して組合の行動によ

つて具體化されてゐない、従つて最も急進的な綱領の下に、最も穩健的な行動が企畫されるし、最も卑俗な主張の下に、最も過激的な行動が目論まれる……」。

しかしながら一層正確にいふならば、日和見主義的綱領と日和見主義的指導との下に、組合が一過激的でないしは闘争的であり得るといふことは、一面においては、その抱懐してゐる理論が行動に具體化されて居らぬ結果である場合もあるが、それと同時に、過激でないしは闘争的であること、日和見主義であること、は、決して兩立せぬものではないといふ事實にもとづく場合がある。たとへば或る一團の労働者が、或る經濟上の利害のために、その傭主と勇攻に闘つたと假定する。しかもその闘ひ方が極めて「過激的」であつたと假定する。それ故にこの一團の労働者は、×××的な階級闘争主義によつて指導せられて居り、決して日和見主義によつて指導せられて居らぬと云へるであらうか。決してそう云ふことは出来ぬ。百年前の英國の小さな労働争議には、幾多の暴力や流血を伴ふた。しかるに百年後における英國四百萬の労働者の總同盟罷業には、ほとんど何等の騷擾をも流血をも見なかつた。百年前の英國の労働者は、百年後の今日の英國の労働者よりも、闘争的であつたらうか。或はより闘争的であつたかも知れない。けれども決して、階級闘争的ではなかつたのである。

これは何を意味するであらうか。直接に當面の經濟上の利害を目標とした部分的な經濟上の闘争は階級闘争の初歩的萌芽的な形であつて、そのうちから眞實の階級闘争が發展し得るものではあるが、それにも拘らず——いな、それ故に——こうした經濟闘争が純然たる經濟闘争にとゞまつてゐる間は

それは發展した形の階級闘争ではないのである。言ひかへれば、それはまだ、労働階級の全般的な目的——この目的は政治的の目的である——のためにする階級闘争ではないのである。眞實の階級闘争は政治的闘争——政治的性質をもつた闘争——である。

そこで階級闘争に對する日和見主義的綱領と日和見主義的指導者のもとにある組合が、一定の傭主を相手とする部分的な經濟闘争において、よし極度に「過激的」でないしは戰闘的な行動を取つたにしても、それは少しの矛盾もないのである。

經濟闘争と政治闘争 資本家はなるべく労働に對する出費を切りつめて、できるだけ利潤を多くしようとし、労働者は資本家の利潤に喰ひこんで、労働に對する報酬を大きくし、生活を改善しようとする。資本家と労働者との間のかような眼前、直接、部分的な經濟上の闘争は、いくらそれを積み重ねても、畢竟するに眼前、直接、部分的な經濟上の闘争に終始するかのやうである。しかし實際の發展は、必ずしもそうでない。闘争の分量の變化がある程度に達すると、それは闘争の性質を變化する。

たとへば労働階級の完全な解放とは、何だらう？ その經濟上の内容は、何だらう？ 合理

闘は、たゞそれだけでは（ないしはプロレタリアの×××政治闘争から切り離して考へれば）、それはプロレタリアの全般的総合的な目的のためにする闘争、×××プロレタリアの政治的目的のためにする闘争ではなくて、部分的な、そして多くは経済上の改善を獲得するために、たま／＼政治的な方法が用ひられてゐるといふだけのものに外ならぬ。それと同時に、プロレタリアの×××政治闘争の立場から見れば、無産階級のかような初步的萌芽的な政治闘争は、（一）さらに高級な政治闘争に發展せしめることができる。また（二）プロレタリアの×××政治闘争の發展は、かような政治運動に、それ自體の意義以上の社會的政治的の意義を持たしめることができる。

共

第五講 労働組合

階級闘争と労働組合 労働組合は直接に資本家の搾取に對抗して、労働階級の利益を擁護するために、一人々々としてはとうてい資本家に對抗することのできない労働者の力を、一つの大きな力に組織した團體である。即ち労働組合は、資本のために搾取せられてゐる階級としての労働者の共通の経済上の利益にもとづいて、その上に結ばれた團體組織であつて、この共通の利益は、資本家の利益と相反するから、したがつて労働組合は、労働者が資本家と闘争するための機關である。

しかるに労働者の共通の利益は、賃銀を一割増加すること、出勤時刻は五分間までの遅刻を黙認すること、工場内に無料診療所を設けること等々といふような、個々の工場における労働条件についてのこまかな経済上の利益に始まつて、労働階級を資本の搾取から完全に解放する

といふ、大きな、全般的な、政治的の利害にまでつながつてゐる。したがつて資本と労働との間の闘争は、やはりこうした方向を指して展開する。そこで労働者の闘争の機關である組合もまた、勢ひこうした闘争の發展の道筋に沿ふて發達する。言葉をかへて云へば、資本と労働との間の闘争が、一人々々の資本家と労働者との間の當面直接の經濟上の利害の争ひといふ、初步的萌芽的の階級闘争から、眞實の意味での階級闘争に發展したように、この闘争の機關である労働組合も、こうした發展の方向をたどつて發達したものである。

初期の労働争議

資本主義が初めて社會の主たる生産様式となり、農民は土地から逐ひ出され、職人はその仕事場から狩り立てられ、最初のプロレタリアンとなつて傭主の工場に追ひこまれた當時から、資本家たる傭主の利害とこれ等の労働者の利害とは、相反してゐた。しかし労働者は、自分の利害の前に立ち塞がつてゐるものが資本家だといふことは、明白には知らなかつた。彼等は生活が苦しくなることを感じ、何かしら頭の上から抑さへつけてゐる力のあることを感じたにはちがいない。しかしこれが資本家であることを知らなかつた。或る時は、

これは新たに發明された機械であると考へた。そこで労働者は新しい生産様式に反抗し、工場や機械のぶち毀はしをした時代があつた。

しかし間もなく労働者は、眞實の相手を知るようになった。

資本と労働とは、生産を進めてゆく車の兩輪である！ 生産は、資本と労働との協力の結果である！ 資本家と労働者との利害は、根本において一致する！ 經濟學者はこう教へてゐる。

けれども労働者が、資本家の工場で、日々の労働の経験のうちから學ぶことは、まさにそれとは正反對であつた。労働者はことごとくに、その利害が傭主の利害と抵觸することを経験する。労働者が少しでも労働條件を自分に有利にし、生活を少しでも、人間らしい生活に引き上げようとするならば、右に往つても左に往つても、いたるところ傭主の利害が、その行く手に立ち塞がつてゐることを経験する。そこで労働者の闘争の鋒先は、工場や機械から、現に自分を搾取してゐる個々の傭主、特定の資本家に向いてくる。労働條件や、傭主の取扱ひや、ないしは傭主や監督の態度や感情上の問題が動機となつて、突發的な罷業が起こる。しかし労働者の間

には組織と統制がないために、この時代の争議には、暴行や騷擾を伴ふことが多かつた。

かような突発的な闘争の経験と、工場における日常の労働の経験から、労働者は雇主との利害の衝突は、決して一時的偶発的なものではなくて、恒久的なものだといふことを學んでくる。従つてまた、同僚たる他の労働者との間の利害の共通も、一時的偶発的なことではなくて、恒久的なものだといふことを覺つてくる。ことに工場制度のお蔭で、多數の労働者が同一の場所同一の機械のもとに、集團的に労働させられる結果として、近代のプロレタリアンは初めて協同して仕事をする習慣と、團體的の訓練と自覺とを與へられる。言葉をかへて云へば、労働階級が、階級的に成熟してくるのである。

その結果は、勢ひ労働者との間の利害の共通にもつた永續的な團體と、團體的の行動となつて現はれる。即ち労働組合と組合運動である。そこで雇主に對する突発的な闘争は、初めて組織せられた恒久的な闘争となるのである。

職別主義の組合 かように労働者が、自分自身の利害と雇主の利害との相い反することを

知り、同僚たる他の労働者との間に利害の共通してゐることを學ぶのは、資本の搾取の行はれる現場たる工場である。そして先づ最初に労働者の頭に響いてくる利害は、直接に日常生活に影響を與へる、具體的な經濟上の利害である。

こうした直接當面の具體的な利害の共通は、同一の雇主に雇傭され、同一の仕事場で働いてゐる比較的數の少ない労働者にも自覺されるが、當時の産業の状態からいへば、同一の職についてゐる労働者の間に、特に痛切に感ぜられたのである。當時はあらゆる産業一般に、機械が今日ほどに進歩してゐなかつた。従つていろいろの種類の労働が、今日ほど平等化せられてゐなかつた。一方には、熟練工と不熟練労働者との間には、容易にこえることの出来ない差異があり、他方には同じ熟練労働の間でも、いろいろの職の間に、いちじるしい相異があつた。そこで眼前の具體的な經濟上の利害から云へば、或る工場の労働者全體に共通した利害よりも、よし別々の雇主に雇傭せられてゐても、職を同じくする熟練工の共通の利害によつて、これ等の雇主に對抗する必要の方が、一そう痛切に感ぜられたのである。

のみならずこれ等の熟練工は、一般労働者よりも、有利な地位を占めてゐた。そこで彼等は一方には、傭主に對して特殊な利害を主張する必要があつたばかりでなく、ある程度までは一般労働者に對しても、特に恵まれた彼等の地位を擁護する必要があつた。

そこでこの時代には、労働者はたいてい、職の區別によつて組合を組織した。同じく金屬を取り扱ふ労働者のうちでも、機械工は機械工組合を作り、製罐工は製罐工組合を作り、同じ機械工のうちでも、旋盤工は旋盤組合を作り、仕上工は仕上工組合を作り、鑄物工は鑄物工組合を作り、鉛管工は鉛管工組合を作り、同じ鐵道従業員のうちでも、機關士や火夫とその他の乗務員とは、それ／＼別々の組合を組織するといふ類であつて、たとへば一つの造船所で、同じ資本家に雇傭せられてゐる労働者が、幾つもの組合に分屬してゐるといふ有様であつた。

たゞに幾つもの組合に分屬してゐるばかりでなく、これらの組合の間には、多かれ少なかれ職業上の軋轢や競争があつた。或る職業がいつれの組合に屬すべきかといふことや、または新しい機械が採用されたり新しい生産行程が實施されたりした場合には、そのために出來た新

らしい職は、どの組合員の仕事に屬するかといふような問題について、類似の職業の組合間には、絶えず激烈な紛争が行はれてゐた。

かような職別的の組合も、初めは狭い地域を限つて作られるが、傭主に對する闘争の必要から、漸次に廣い地域に及ぼされ、後には全國的の職別組合となつたものが少なくない。

地方評議會の組織　しかしながら労働者の根本利害は、たゞ單に職業々々で資本家の利害と對立してゐるわけではない。もちろん或る職業には、その職業に特殊な利害がある。けれども眼前の具體的現實的な利害へ利害へと掘り下けてゆけば、詰りは一人々々の労働者に、めい／＼特殊な利害があるといふことになる。資本主義のもとにおける資本と労働との闘争は、まさにこれとは正反對の方向を指して發展するものである。資本家も労働者も、眼前の具體的現實的な利害から、多かれ少なかれ遠方にある、より一般的、より抽象的な利害の對立を意識して、そのために闘ふようになる。

資本と労働との闘争が、かような方向へ發展するにつれ、労働者は資本家に對抗するために

は、職別的な組合の運動だけでは、充分でないことを悟つてくる。そこで或る一定の地域にある種々なる職業の組合が、初めは一時的に、のちには恒久的に提携して、資本家に當ることとなる。たとへば英國の労働組合評議會（文字通りには、諸職業評議會）や、フランスの労働組合同盟などは、この必要に應じて生まれたものであつて、いづれもその地域内のすべての組合で構成せられた地方的の組織である。

職別的の組合が土臺となつて、その組織のほかに出来てゐるかのような地方評議會は、職業的には幾つかの組合に分屬してゐる組合員を、實際に地方的に組織し直したものでなく、種々なる組合の代表者が集まつて、共通の問題を處理したり、共同の動作を協議するための機關に過ぎないものである。従つて多くは緩やかな聯合協議機關であつて、鞏固な結束力には缺けてゐる。それにも拘らず、職別組合以外に、こうした機關の生まれたことは、或る地域のうちにある有ゆる職業の労働者の間に、共通の利害——即ち階級的の利害——が意識せられたことを物語るものであるから、組合運動の大きな進歩であつた。現に職別組合が發達し、そして

今日にいたるまでその傳統から脱しきれなかつた英國では、労働組合評議會の活動が盛んになつた時期が、いつでも組合運動が進歩的闘争的となつた時期である。

いろ／＼な職別的組合が集まつて、全國的の一聯合團體を組織してゐる場合がある。たとへばアメリカ労働聯合會がそれである。かような場合にも、職別が土臺となつてゐる限りは、狹隘な職業心理が支配してゐるから、全體の結束は極めて弱いものであつて、緩やかな聯合體以上の組織には出られない。

産業別主義の組合 資本と労働との闘争がもう一つ發展してくると、單に労働條件を維持改善するといふ純然たる經濟上の闘争の上から見ても、舊式の職別組合では、もはや有効に資本と對抗することが出来なくなる。

職別組合の發達した當時と今日とは、産業の狀態に、非常な相異ができてきた。資本はますます少數の大資本家の手に集中され、少なくとも一國の産業の脊椎骨をなしてゐる主要な部門では、企業はくらべものにならぬ程、大きな規模で行はれるようになり、この大きな企業は、さらにトラストやシンヂケートを組織して、いやが上にも大きくなつてくる。この大資本家大

工業主を向うに廻はしては、在來の職別組合ではとうてい間に合はぬ。そこで各々の職別で作つてゐた組合を一緒にして、一つの産業といふ、もつと大きな基礎の上に建てかへることが必要となつた。たとへば、在來は製鐵工組合、木工組合、鑄造工組合、ペンキ師組合等々に分れてゐた造船産業の一切の労働者を、一つの造船工組合に組織しかへたものが、即ち産業別組合である。それと同時に産業別組合は、同一産業の労働者は、全國を通じてたゞ一つの組合に組織しようとするものである。

けれども何を一つの産業と認めてよいかは、産業の發達につれて變つて來る。かつては別々の産業と見做されてゐたものが、一つの産業と認められてくることがある。また同一産業に屬する大企業が、トラストやシンチケートを作つて一つになるばかりでなく、異つた産業に屬する幾つかの大企業が、合同することがある。また一つの大資本が、同一の企業のうちに、燃料の採掘から原料の生産、船舶の經營、完製品の生産と販賣にいたるまで、一と手にやつてゐるものが少なくない。そこで今日では、労働組合の組織は、必ずしも經濟上の意味で一つの産業

と認められてゐる範圍に限るわけにはゆかなくなつた。たとへば鐵道に附屬するホテルの従業員は、純然たる産業別といふ點からは、旅館や公衆食堂などの従業員と同じ組合を組織する苦であり、同じく聯絡船の船員は、海員の組合に加入すべきであるが、多くの場合は鐵道従業員と共に、一つの組合を組織する方が、はるかに闘争力を大きくする。即ちこの場合には、企業別の組織が加味せられることとなる。

また産業別主義による現在の組合には、實際は、普通に一産業または一企業と認められてゐる範圍よりも、廣い範圍の労働者を包容したものがあつた。たとへば金屬工組合の如きは、金屬を原料とするすべての産業の労働者を組織してゐるものであつて、普通には、金屬を原料とするすべての産業が、必ずしも一つの産業とは見做されて居らぬ。従つて舊式の職別組織にも、類似して幾つかの職業を一つにしたものがあつたように、この場合は、類似した幾つかの産業を包容した産業別組合とも見ることが出来る。

そこで舊式の職別主義の組合に對して、今日、産業別主義の組合といつてゐるものは、必ず

しも嚴密に、一般普通に一産業と見做されてゐる産業部門の範圍に限つたものではなく、企業別ないしは資本系統別の組織や、類似した數産業にわたる組織を加味したものである。産業別主義の組合が、その組織の範圍をどこにおくべきかといふことは、要するにその國の産業の狀態にもとづいて、主として、最大の闘争力を發揮することを目標として定めねばならぬ。

かつて英國の鉛管工組合と仕上工組合との間で、鉛管の仕上げについて多年の紛議がつゞいたが、二インチ半以下の鉛管の仕上げは鉛管工がやり、二インチ半以上の鉛管の仕上げは、仕上工の領分に屬するといふことで、結末がついてゐた。ところが二インチ半の鉛管については、協定を忘れてゐたために、後日再び紛議が起つたといふ挿話がある。この一挿話によつても、職別主義の充分に發達した國における職別組合なるものが、如何に狹隘なものであるかを知ることが出来る。しかるにこれ等の職別組合は、全國的組合または全國的聯合體に發達してゐるものが少なくない。従つてこれ等の全國的な職別組合を幾つか一緒にすれば、全國的な産業別組合となる。そこでこの場合には、組合運動を全國的に整理し統一する道は、主として産業別主義をもつて、職別主義と闘ふことにあるのである。しかるに日本においては、組合は、かような程度にまで職別的の發達をして居らぬ。言ひかへれば日本の勞働組合が多數の小組合に分立してゐる現在の缺點は、組合が職別的に分立してゐることより

も（もちろん職別的の分立もあるが）、むしろ同一の職業または同一の産業の組合が、幾つもの競争組合に分立してゐることにある。従つて組合運動の整理と統一のためには、産業別主義によつて狹隘な職別主義と職別心理と闘ふと同時に、組合幹部の狹隘な利己主義、小英雄主義、割據主義と闘ふことが必要である。

また職別組合の發達した國では、産業別組合主義は職別組合主義に對抗して主張せられたのであるが、職別組合主義がこの程度に發達して居らぬ我が國では、産業別組合主義は、主として組合の地方的（即ち地域的）組織（地方同盟、地方聯合會など）に對立する主張の如くになり、問題は職別主義が産業別主義かといふ形でも、むしろ地域組織が産業組織かといふ形で提出されたのであつた。その結果として、産業別組織の重要を強調することは、必然に地域的の組織を輕視することを意味するかのうに思はれた。（現にこの誤謬に陥つた場合が少なくない）。けれどもこれは誤つてゐる。産業線に沿ふた縱の組織はいつでも進歩的であつて、地域による横の組織がいつでも保守的であるかの如く考へるのは、事實に反してゐる。フランスでは、革命的サンヤカリズムを代表したのは地方同盟であつた。英國の組合評議會は、會てにおいても組合の急進主義を代表し、今日においても左翼少數派運動の勢力の根據である。これに反して産業別（又は職別）による組合の聯合は國際的にまで發達し、現在二十八の國際機關を組織してゐるにも拘らず、その大多數は保守的である。組合の産業別組織を重要視するために、地域的の組織を輕視するのは、産業別主義はそも／＼職別主義に對立した

のたといふことを見落した誤謬にもとづいてゐる。

全國的總同盟——全階級的の組合組織

全國的產業別組合が完成した時に、労働者は初めて、今日の有力な大資本家大工業主と對抗するに足る、偉大な力をもつた組合の組織を持つのである。そして資本と労働との闘争は、もはや一つの工場の傭主と労働者との間の闘争ではなくて、同一産業の労働者全體が、組織せられた強大な力となつて、同一産業の資本家全體の力に對抗する闘争となるのである。

しかしながら今日は、各産業の資本家が、必ずしも互ひに孤立してゐる譯ではない。一方には、大企業と大企業との間に合同や聯盟が結ばれるばかりでなく、こうして一そう大規模になつた企業を支配する實権は、さらに少數な金融資本家の手に、ますます集中せられてゐる。でなくとも大資本家大工業主は、同一産業の間で提携聯絡をしてゐるばかりでなく（たとへば船主同盟、大日本紡績聯合會など）すべての産業の資本家の間にも、公然あるひは内密に同盟が結ばれてゐる（たとへば英國の工業主同盟、日本の工業クラブなど）。即ち今日の資本家は、産

業別的に同盟してゐるばかりでなく、全國的全階級的にも同盟してゐるのである。全國的全階級的に團結した資本の力に對抗するためには、一切の労働者を全國的全階級的に結束した組織が必要になつてくる。産業別に從つて組織せられた全國的組織が、さらに一つに結合した時に労働組合は初めて、労働者の全階級的の組織となり、資本と労働との闘争は、全國の資本家全體と、組織せられた全労働者との間の闘争に發展する。

労働組合の全國的全階級的の組織は、全國的な産業別組合が集まつた場合に、初めて完全な形で出來あがる。そこで職別的の組合や地方的の組合が融合して、完全な全國的産業別組合に發達することは、完全な全國的全階級的組織の出來あがる條件なのである。しかしながらこれは必ずしも、先づ現在の組合が完全に産業別組合に整理せられた上で、初めて全階級的の組織に進まねばならぬといふ意味ではない。實際においては、産業別組合の發達が全階級的組織を促進すると同時に、全階級的の組織が産業別組合の完成を促進する場合がある。けれどもいづれにしても、労働大衆が、その階級意識を蔽ふてゐる狭隘な職別心理と割據主義から或る程度まで解放されなかりば、産業別による組合の整理合同も、全階級的組織の實現も、もとより望まれぬ。

労働組合の全國的全階級的の組織は、労働總同盟、労働組合總聯合、ないしは労働組合會議

といふような、いろいろの名稱のもとに發達してゐるが、その組織の性質の上でも、單に緩やかな聯合協議會にすぎないものもあり、またその中央機關が、全國の組合運動を指揮する實際の行動力を備へてゐるものもある。大體において、これを構成してゐる組合の組織が雜駁であればあるほど、全國的の組織は、行動力のない緩やかな聯合協議機關に過ぎないものとなる。けれども資本と労働との闘争の發展は、全國的全階級的の組織を、ますます有力な行動の力を備へたものとする必要としてゐるのである。

たとへば英國労働組合大會は、近頃までは、毎年開かれる組合の全國會議に過ぎなかつたが、近年にいたつて、大會から大會にいたる間の常設機關として、總務委員會が設けられた。即ちそれだけ英國の労働組合大會は、一時的の會議から永續的の組織の方へ進んだわけである。しかし最近にいたつては、總務委員會の職分を擴大して、英國の労働組合運動を指導する眞實の中央機關とすべしといふ主張が、漸次に有力となり、過般の總同盟罷業に當つては、「一切の權力を總務委員會に！」「一切の權力とは、組合運動の指揮權である」といふことが、左翼分子の標語となつた。

労働組合の組織の目標 かように全國の労働者は、一産業一組合の原則にしたがつて、各

産業別の大組合に組織される。この全國的産業別組合は、地域々々によつて支部に分けられる。支部はさらに工場を單位として再分される。もし一産業の内部に、かなり掛け離れた種類の職業部門を包容してゐるために、特殊な利害が代表せられぬ恐れのある場合には、これに應じた部門に分ける。

産業別の組織は労働階級を縦斷した組織であつて、決して全階級的の組織であるとは云はれない。そこでこの缺點は、すべての産業を通じた横斷的な組織をもつて補はねばならぬ。即ちおの／＼の地域においては、その地域内にあるすべての産業の組合支部によつて地方評議會（または組合同盟）を組織する。そしてすべての産業別組合と、地方評議會とを結合したものが、全國的の組織である。

各産業の組織においても、全國的の組織においても、組織の原則は民主的集中でなければならぬ。即ち一方には、組合大衆の意志が最も敏速に、最も正確にその中央諸機關に反映すると同時に、中央機關は單なる聯絡の機關ではなくて、組合大衆の活動力を集中した有力な行動

の機關となり、有力な指導の機關となるような組織である。

サヴェート社會主義共和國の労働組合は別として、いかなる資本主義國の組合運動も、今日
は尙ほ、かような組織を完成して居らぬが、これが各國の労働組合運動がその闘争のうちから
發見した、最も完全な、最も必要な組織の形態なのである。

國際的の組織——労働組合インタナショナル　しかしながら資本と労働との間の闘争の發
展は、決してこの段階でとどまるものではない。資本主義の存続するかぎりには、そしてそれが
發展する限りは、資本と労働との間の根本利害の對立は、たゞに消滅せぬばかりか、資本主義
の發展と共にいよく發展するからである。

資本主義は今やその生立ちの故郷である國と國との境を突破して、完全に世界的となつた。
今日の資本主義は、もはや一國の資本主義ではなくて、國際的の資本主義である。一國一國に
ついて見れば、資本はますます集中され、企業はますます大規模となり、さらにこれ等の大企
業は、極めて少數の金融資本家によつて支配せられてゐる。今日の世界は、こうした幾つかの

資本主義強國によつて支配せられてゐるのであるが、さらに高い所に立つてこの世界を見下ろ
すなら、これ等の幾つかの資本主義強國は、さらに少數な——ほんの二つか三つの——國際的
な金融資本家の塊まりによつて支配せられてゐるのである。

たとへば今日のドイツは、英米（特に米國）の金融資本によつて支配せられてゐる殖民地に
ほかならぬ。そこで若しドイツの労働者が擡頭して、ドイツの政權を完全にその手に握るとい
ふような形勢になつたなら、第一に危険を感じるのは、英米の金融資本である。そこで苟くも
ドイツの労働階級の勢力を増すことには、ドイツのブルジョア政府ばかりでなく、英米のブル
ジョア政府がまつ先きに反對する。かようにドイツの労働階級の利害の前には、ひとりドイツ
の資本家階級ばかりでなく、資本家階級の國際的の勢力が立ち塞さがつてゐるのである。

かように資本主義が國際的の性質を帯びてくるに従つて、各國の資本家の間には、國際的な
階級意識が進んできた。彼等は、今日資本家階級が一國において支配をつづけてゐられるのは、
彼等自身の孤立した力ではなくて、彼等が國際資本主義といふ大きな力の一部分をなしてゐる

からだといふことを、はつきりと知つてゐる。資本家階級にとつては、自國における労働階級よりも、他國における資本家階級の方が、利害休戚を同じくする兄弟なのである。そこでいづれの國において労働階級が頭をもたけようとしても、各國の資本家階級は、自分自身の足許に起つた危険として、これを鎮壓するためには、内輪喧嘩をやめて國際的に團結するのである。資本家階級の間に國際的な階級意識が發達し、労働に對する資本の闘争が國際的な性質を帯びきたるに従つて、労働階級の間にも、國際的な階級意識が發達する。たゞ今日では、資本家階級の國際的な階級意識にくらべて、労働階級の國際的な階級意識は、遙かにおくれてゐるのである。

國際的に團結した資本の力に對抗する唯一の方法は、國々において組合に組織せられた労働階級を、さらに國際的に結合することである。たゞに結合したばかりでは充分でない。全世界の組織労働者が鞏固な結束と統制との下に、一人の巨人の如くに行動するためには、單に一年一回の國際會議を召集して、當り障りのない空證文に均しい決議をするばかりでなく、單に國

際的の聯絡通信機關を設けるばかりでなく、眞實に行動の力があり、眞實に統制の力があり、眞實に世界の組合運動を指導するところの、有力な國際的中央機關を設けることである。

赤色労働組合インタナショナルは、かような必要に迫られて組織せられたものであるが、まだ各國組合運動の大多數を包容して居らぬ。赤色労働組合インタナショナルに對立して、國際労働組合聯合（アムステルダム・インタナショナル、又は黄色インタナショナル）がある。各國の改良主義的指導者の率ゐる組合は、多くは尙ほこれに加盟してゐる。かように國際労働組合運動の戦線は、今日は二つに分裂して居つて、労働階級の間には、統一した鞏固な國際的組織を缺いてゐる。

アムステルダム・インタナショナルに加盟する各國の組合の間には、金屬工、坑夫、運輸労働、農業労働など二十八の産業または職業によつて、おの／＼國際的の組合會議が開かれ、國際書記局が常設せられてゐるが、ほとんど通信聯絡機關にすぎないものである。

労働組合の職分とその進化

労働組合は資本と労働との闘争の發展に伴ふて、この發展に

沿ふて發達したものである。この事實は、労働組合の任務と職分もまた、これに伴ふて變化したことを物語つてゐる。

労働者の利害は、一つ一つの場合について、特定の傭主の利害と衝突した。資本に對する労働者の闘争は、こうした利害の衝突から出發した。

しかしかような利害の衝突は、決して相互の間に關係のない離ればなれの事柄ではなくて、その根底には永續的な利害の衝突が横はつてゐることを悟つてくると、初めて労働組合が組織され、一時的突発的な闘争は、初めて組織的永續的な闘争となるのである。

けれどもこの段階に進んでも、労働者を組合に團結せしめたものは、當面直接の經濟上の利害にほかならぬ。資本家の利害と労働者の利害とは根本的に相い反して居り、この二つの階級の歴史的使命は正反對の方向を指してゐる。そして當面直接の經濟上の利害の衝突は、この根本的な階級對立がおりくくの機會に、いろく々な形を取つて部分的に現はれたものに外ならぬ。そこで當面直接の經濟上の利害を目的とした闘争は、眞實の意味での階級闘争にまで發展する

性質を備へてゐるものである。けれどもこの段階では、資本家も労働者も、これを意識してはゐなかつた。

そこでこの發展段階では、労働組合の職分は、傭主たる資本家に對して、労働者の當面直接の經濟上の利害を擁護することがそのすべてであつて、これは畢竟、労働組合は労働條件の維持改善を目的とする闘争の機關である、といふことに歸着する。即ち労働組合の職分は、工場における傭主の經濟上の搾取と直接に闘ふことであつた。

「直接」といふ言葉は、アルジョアの問では「暴力」と同じ意味に用ひられてゐる。たとへば帝國議會の議場における「議員の直接行動」等々。しかしながら労働階級の組合運動では、暴力必ずしも、資本の搾取に對する直接の闘争を意味するものではない。

労働條件を維持改善し、資本家と交渉するに當つて労働者の力を著るしく増大したといふ點では、労働組合は今日までに、相當の効果をあげた。ことに資本主義がなほ登り坂をたどつてゐる間は、資本家は或る點までの讓歩によつて、労働者を満足せしめることができた。けれど

も資本と労働との間の根本利害の対立は、そのために少しも減ずるものではない。いな反対に、それは資本主義の発展と共に、ますます増大する。そこで資本と労働との間の闘争は、いつまでもこの段階でとまつてゐることはできぬ。現に一職業、一工場、一小地方の労働者の共通の利害を擁護するために生まれた労働組合は、今日では、當年の存在の理由と行動の範囲とを是るかに踏み越えて、いまや一産業の労働者、全國の労働者、いな全世界の労働者を階級的に組織して、ある特定の傭主に當るばかりでなく、資本家階級そのものに對抗するための、闘争機關となつてゐる。

資本と労働との闘争がこの段階にまで發展すると、それはもはや當面直接の經濟上の利害を究極の目的とする闘争ではなくて、二つの階級が、相い反した歴史的任務を遂行するための闘争に發展する。即ちその目標は、もはや労働條件の維持改善にとどまらないで、労働階級の完全な解放を目標とする闘争に推移する。かような闘争は、即ち眞實の意味、嚴密な意味での階級闘争であつて、それはもはや純然たる經濟上の闘争の限界を踏み越えて、プロレタリアの政

治的闘争に展開したものである。

従つて、労働組合の職分は、労働條件の維持改善であるといふ定義が時代おくれとなつたばかりでなく、労働組合は労働階級の經濟闘争の機關であるといふ定義すらも、嚴密にいへば、現在の労働組合には、もはや無條件では當て彼まらぬものとなつた。

労働組合と經濟闘争　それでは労働組合は經濟闘争の機關ではなくなつて、労働階級の政治闘争の機關に變はつたかといへば、必ずしもそうでない。いな、決してそうではないのである。

労働組合は依然として、被搾取者としての經濟上の利害——すべての労働者に共通する利害——にもとづいて、労働者の大衆を結束する大衆的の組織であつて、その行動の主たる領分は依然として經濟上の闘争なのである。けれども資本家階級と労働階級との全階級的の闘争が現在の段階に發展した今日では、この經濟上の闘争は、經濟上の利害といふ範圍内に終つてしまふものではない。それはプロレタリアの政治的闘争に發展するものであり、發展せしむべきも

のであり、プロレタリアの政治的目的を眼中において闘はるべきものであり、またプロレタリアの政治的目的を眼中においてのみ、初めて意義あるものである。今日の労働組合は、当面直接の経済的利益にもとづく経済闘争を、たゞそれだけで獨立の意義のあるものとは考へないで、プロレタリアの政治的目的——即ちプロレタリアの階級的、全體的の目的——を常に眼中におき、プロレタリアの政治的闘争に従属した、もしくはその一部分として離るべからざる關係を持つものとしての経済闘争——政治闘争に展開するところの経済闘争——をもつて、その任務としてゐるものである。そこで資本主義の初期から全盛期にいたる過去の労働組合と、資本主義の没落期における今日の労働組合とが根本的にちがつてゐるところは、経済闘争を主たる行動の領分とするか否かにあるのではなくて、その経済闘争が、かような意識によつて指導せられてゐるか否かといふことにある。言ひかへれば、何のために経済闘争をしてゐるか、経済闘争を如何に理解してゐるかといふことにある。

一部の極左翼主義者は、自分自身が最近にいたつて初めてプロレタリアの全階級的闘争——即ち政

治闘争といふもののあることを発見し、今まで組合の経済闘争を萬能の闘争最高の闘争と信じてゐた幻滅と反動から反對の極端に挑れ返へされ、組合の経済闘争の意義を見失ひ、甚しきに至つては、政黨の萬能、組合の無用を主張した人さへもあつた。こゝまで徹底せぬ者も、事實上、労働組合を政黨化——しかも前衛黨化——しようとする人々があつた。初めて政治闘争の重要を知つた彼等は——新しい知識を得た時に多くの人々のするやうに——労働組合の経済闘争とプロレタリア前衛黨の政治闘争とを「辯證法的に把握する」ことができないで、この問題を「政治闘争か経済闘争か」といふ形で提起し、その一方を取るために、他方を棄てようとしたのである。

ブルジョアジーに對するプロレタリアの闘争を全體として見れば、当面直接の經濟上の利害を目的とする部分的經濟的の闘争は、全體的政治的の闘争に展開したのであるが、これは部分的經濟的の闘争がなくなつた、若くはその必要がなくなつた、といふ意味ではない。經濟闘争から政治闘争への展開は、無産階級運動の一生涯に、たゞ一回行はれるものではなく、絶えず行はれるものである。そして火繩銃が連發銃に展開して、火繩銃が永久に無用となつたやうに、この一回の展開ないしは轉換によつて、經濟闘争を永久に無用にするものではない。いな反

對に、全般的政治的の闘争が發展すればするほど、部分的當面的な經濟上の闘争は、無用とはならないで、却つてますます必要を加へてくる。この地球の上では一つのエネルギーが絶えず他のエネルギーに轉換してゐるように、プロレタリアの闘争の世界では、經濟闘争は、不斷に政治闘争に展開するものであり、展開しなければならぬものである。

人類といふ種屬として見れば、人間は過去幾十億年の歲月により、單細胞動物から進化して人間に發展したものである。けれどもこの人類種屬を構成してゐる一人々々の個人について見れば、母胎の中では、やはり單細胞動物として發生し、大體において種屬としての人類がたどつたのと同じ道程をたどつて人間となるのである。ちよつどその通りに、プロレタリアを一つの歴史的の存在物として見れば、當面直接的部分的經濟的の闘争から出發して、いまや最高の階級意識と最高の階級闘争とに到達したものである。けれどもプロレタリアを構成する一人一人の個人について見れば、彼等は決して、一個の階級としてのプロレタリアが今日到達してゐる最高の階級意識を備へて、母親の胎内から出てくるものではない。實際に生れてくるものは、

プロレタリアの意識をもつたプロレタリアンではなくして、プロレタリアの意識をもたぬプロレタリアンなのである。そればかりではない。彼等の多數は、プロレタリアの意識を持たぬばかりでなく、多かれ少なかれ、ブルジョアジーの心理を植ゑつけられてゐるプロレタリアンなのである。そこでプロレタリアを構成してゐる一人々々の個人について云へば、彼等が今日階級としてのプロレタリアの到達してゐる最高の意識に到達するためには、大體において、階級としてのプロレタリアが通過したのと、同じような道程を経なければならぬ。そしてこの過程を最も有効に、最も短い期間に完了せしめることは、労働組合の重要な任務の一つである。この意味において、労働組合はプロレタリアの學校である。

労働組合はすべての労働者に共通する被搾取者の經濟上の利害によつて、労働者の大衆を、資本に對する初歩的な闘争に動員する。そしてこの闘争によつて、労働者の大衆を、プロレタリアの最高の意識に教育し、プロレタリアの最高の闘争に導くものである。労働組合の主たる任務は、經濟闘争の領分にあると同時に、經濟闘争の限界を突破することにある。

しかしながら吾々の闘争が経済闘争の限界を出た瞬間から、直接に吾々の闘争を指導する組織はもはや労働組合ではなくて、プロレタリアの指導的黨派が必要となるのである。

労働組合は何をなすべきか　そこで以上を約説すると、先づ第一に、労働組合は職業的、ないしは思想的に門戸を固めた少数者の結合ではなくて、労働者の大衆を包容した大衆的の組織でなければならぬ。

そのためには、労働組合は、被搾取者としての共通の経済上の利害をもつて、團結の基礎とし、経済上の利害(労働条件の維持改善)のために闘ひ、資本の攻撃に對して労働者の経済上の利害を擁護しなければならぬ。プロレタリアの全般的の目的にくらべて、それがいかに小さく、いかに部分的なものであらうとも、労働組合は労働大衆が日常の労働生活のうちに直接に當面する利害を、忠實勇敢に代表し、これによつて労働大衆を階級の闘争に動員しなければならぬ。

しかしながら斯のような日常の経済闘争によつて獲得した部分的の勝利と改良とは、たゞそれを蓄積し合計したのみで、労働階級の完全な解放となるものではない。労働階級はかような部分的の勝利と改良とによつてその力を強よめ、この新しい陣地によつて、その次の攻勢に進まねばならぬ。

それと同時に労働組合は、かような部分的な経済闘争によつて、労働大衆を教育しなければならぬ。労働組合は、最も初歩的な経済闘争から出發して、最も發展した政治闘争にまで大衆を育て上げる學校である。

したがつて、労働組合は政治闘争の機關ではないが、政治闘争の機關たる無産階級の政黨を支持し、その力の基礎となり、力の源泉となるべきものである。

労働組合はまた、主として日常の闘争とその闘争の發展とによつて、労働大衆をブルジョア思想ことに小ブルジョア的思想から獨立させ、プロレタリアの集團主義に教育し、労働大衆の間に新しいプロレタリア的の訓練と、新しいプロレタリア的の秩序とを樹立する重要な任務をもつてゐる。資本主義のもとにおいては、労働組合の任務は、主として資本の搾取に對する闘

争の機關としての職分にあるが、プロレタリアが完全に政權を獲得すると同時に、労働組合には新たな建設的な任務が加はるものである。労働組合は、即ちこの新しい任務に對して、労働大衆を教育してゐるものである。

左翼運動と左翼組合 労働組合は學校である。けれどもこの學校は、むつかしい入學試験をして、千人の志望者のうちから百人二百人を選び出して入學させる學校ではなくて、すべての入學志望者を入學させ、いま入學を欲しない者までも、入學の志望を起こさせて入學させる學校である。そこでは最も初歩的な、イロハの手ほどきから教へる學校なのである。ことにその教育の特色は、抽象的な講義ではなくて、主として實物教育であり、外からの詰め込み主義ではなくて、萌芽として存してゐるものを成長させ、内に眠つてゐるものを喚び覺ます教育なのである。

労働組合のかような職分は、勢ひ労働組合は無産者運動のいろいろの組織のうちで、最も廣い意味での大衆的の組織、最も廣汎な大衆を包容した組織であり、また、なければならぬといふことは、組合の内部には、最も高い階級意識の水準に達した要素を包容してゐると共に（これは最も必要なことである）、最も初歩的な階級意識の水準にある要素をも包容してゐること、またこれらの要素をも動員してそのうちに包容しなければならぬことを意味してゐる。

これは労働組合の闘争が、最も初歩的な日常當面の經濟上の要求にもとづく闘争——謂ゆる自然發生的な闘争中の最も自然發生的な闘争と緊密に接続してゐなければならぬことを意味してゐる。であるから組合運動がこの種の經濟闘争を「揚棄する」ことは、組合運動そのものを「揚棄する」ことを意味してゐる。

労働組合のかような性質は、組合内における左翼分子——より高い階級意識の水準に達した要素——と左翼運動との任務を極めて重要なものとするのである。即ち組合内における左翼運動の職分は、労働者の最も初歩的な利害をも適切に代表し、最も初歩的な要求にもとづく闘争

をも忠實に立派に遂行する事によつて、組合大衆の信頼を増し、たえず組合に流れ込んでくる階級意識の低い要素を、より高い意識の水準に引き上げ、「自然發生的な」日常眼前の經濟闘争を蔑視したり、放棄したり、サボタージュしたりすること（これを名づけて組合主義の「揚棄」と唱へてゐるやからがある！）なしに、なほ且つ組合運動が、この種の狹隘な闘争の意識の範圍内に固定し膠着することを防ぎ、組合大衆の初歩的未發展な意識を基礎としてその上に築つかれようとする保守的革命的な組合官僚主義の形成と闘ふことなどである。

そこで全無産階級解放運動のうちに占める労働組合の重要な意義の一つは、階級意識の發達した左翼的分子や前衛分子と、一般大衆とを、一つの組織のうちに、緊急に結びつけておくことにある。労働組合はこの二つの要素を結びつけておくところに重大な意義を持つのであつて、これを引き離なすところに意義があるものではない。労働組合は一般大衆のうちから、階級意識と×××理論の入學試験に及第した精銳分子を選び出し、これを一般大衆と引き離して、別個の左翼分子ばかりの團體——左翼組合——に組織することを職分とするものではないのである。

であるから「左翼組合」——左翼分子のみの組合——は、保守的指導者と組合官僚とのために、左翼分子がどうしても組合内に止どまることを許されないうで、組合から排除せられた場合にのみ、これらの組合員の離散を防ぐために、一時的の方法として造られた時、初めて意義あるものであり、初めて許るべきものである。

レーニンがプロレタリア前衛黨——即ち無産階級の×××黨派——の結成に焦點をおいて書いた「何を爲すべきか」のうちに、吾々は結合するために、先づきれいに分離しなければならぬと云つてゐる。この言葉をとらへて来て、労働組合の分裂を是認しようとする人々がある。これは初めて小學校で二二が四を覚えてきた子供が、あらゆる場合に二二が四を覚えてはめようとするのと同じ誤謬である。左翼的な分子は、大衆的な組織の内部にあつてその一翼をなす場合にのみ左「翼」であつて、また左翼としての任務を完了することができる。その如く労働組合の左翼運動とは、對立し併立した左翼組合を組織して——即ち縦に左翼分子を組織して——右翼組合と闘争することを指すのではなくて、現に併立してゐるあらゆる大衆的な組織を横に貫通して左翼分子を結合した

運動なのである。これは最も困難な最も忍耐を必要とし、最も弾力のある戦術を必要とする道であつて、これに反して左翼組合を組織することは、最も容易な、最も忍耐と努力を必要とせぬ、最も自己満足的な道であつて、それは練達の足りない左翼気分的な要素がしばしば取るところの、道であつて、つまりは最も抵抗の少ない一線に沿ふて遁走することを意味してゐる。

第六講 資本主義下の農民

資本主義社會における前時代の生産方法の遺物 今日社會は資本主義の社會である。資本主義の特徴の一つは、機械力を應用して大量的に商品を生産する、大規模な工業である。しかし資本主義の社會にも、決して資本主義以前の家内工業や手工工業による、小さな生産が残つてゐないわけではない。もちろん資本主義が発達するに従つて、かような前時代の遺物たる小生産は、しだいに滅亡するにはちがいないが、實際には、今日もつとも進歩した資本主義國にも、舊時代の生産方法が多かれ少なかれ残つてゐる。即ち資本主義の社會は、かような前時代の遺物たる小生産によつても、その必要の一部分をみたしてゐるものである。

そこで今日の社會には、こうした前時代の生産方法が全くあとを絶つてゐるわけではなく、いろく資本主義以前の生産方法をも、そのままに取り入れて、資本主義といふ大きな建物

の一部分として使ひ、ふるい機械組織の一部分さへも、そのまゝ新しい機械組織の一部分となつて運轉してゐるところに、今日の社會が資本主義の社會たる所以があるのである。かように家内工業や手工工業などは、資本主義以前から今日にいたるまで、依然として存續してゐるものではあるが、昔と今は、その性質——社會の生産における役割——が變つてゐる。昔は社會の生産の基調であつて、一切の社會組織と社會生活とが、その色彩に染められてゐた。しからに今日は、家内工業や手工工業までも、大規模な機械工業の上に立つ資本主義の色彩で染められてゐる。被征服民を殺してしまはないで、そのうちの幾人かを奴隸として働らかせるように、資本主義は前時代の生産方法のどれだけかを、絶滅はしないで、或る種の必要をみたすために、奴隸として残してゐるのである。

かように今日の社會にも（ことに後進國たる日本には）、昔の小生産や小企業が澤山残つてゐるが、これ等の前時代の生産方法も、今日は完全に資本主義に隸屬し、その支配を受けてゐるものである。たとへば三人か五人の職工を使つて、自分も一緒に仕事をしてゐる小さなものは

る町工場の傭主は、外形の上からは獨立の一企業家であるが、實際には、何らの獨立をもしてゐないものである。これ等の小生産は、大規模な機械工業にくらべて、遙かに生産力が低いから、従つて生産力の高い大規模な機械工業の間にまざつて、辛うじて存在をつゞけてゆくためには、労働者を極度に搾取しなければならぬ。であるから家内工業や手工工業や、すべての小企業の場合には、大工場にくらべて遙かに労働條件が劣つてゐるのが常である。また労働者は極度の搾取を受けてゐるにも拘らず、企業そのものゝ存在が日に日に六ヶ敷くなつてゆくのは、その爲めである（小商人の場合も同じである）。資本主義の社會において、こゝにいふ立場におかれてゐる舊時代の生産方法のうちで、しかも最も重要なものは、いふまでもなく農業である。

資本主義と農業 農業は資本主義社會が、前時代から承継いだ生産の方法であるが、穀物は工場で生産することができないから、資本主義社會はこの舊時代の生産方法を、そのまゝに用ひてその必要をみたしてゐる。しかし今日の農業は、完全に資本主義に支配され、資本主義のうちに取り入れられて、その一部分となつて働らいてゐるのである。そこで今日の農業は、

資本主義社會に残つてゐるその他の舊るい生産方法の遺物と同じように、食べるための穀物を作つてゐるものではなくて、商品としての穀物を作つてゐるものである。したがつて資本主義社會に残つてゐる家内工業や手工工業などと同じように、生産力の低い農業は、最も不利な立場におかれてゐることになる。工業資本が一度び支配の力を握つてからは、農業はその附屬物として、たゞ工業の必要に奉仕するものとなる。ことに世界市場の競争が甚しくなればなるほど、一國の資本主義は、他國の資本主義と競争するためには、ますます生産費用を切り詰めるべからぬ。これは一方には、労働者の生活標準を引き下げようとする努力となり、他方には、労働者の生活費を決定する穀物の価格を壓迫する政策となる。資本主義國における産業政策の基調となつてゐるものは、農業の利害を、完全に工業の利害に従屬せしめることにほかならぬ。

こうした資本主義の經濟上の壓迫のために、農業そのものも漸次に變化する。工業の生産力が増加すればするほど、これに對する農業の生産力の割合は低下する。したがつて農業が支え得る人口の数は減じてくる。そこで多數の農民は土地を離れ、無産民となつて都會に流出し、農村荒廢と名づける作用が進行する。のみならず、工業の方面では、資本に對する利潤の率はだんく低下するのが一般の傾向である。これは農業の上にも影響する。そして僅かばかりの所有地を耕やしてゐたのでは、利潤と労働の報酬とを合はせても、もはや一家を支へることができなくなる。そこで土地は急速に大地主の手に集中する。

大地主の手に集中した土地は、裕かな資本を持つてゐる農業企業者が、地代を拂つて借り受ける。そして機械を應用し、土地から「解放」されて「自由」になつた農業労働者を雇傭して純然たる商品としての穀物を生産する。そこで農業は、生産の技術においても或る程度まで工業化し、經營の形においても資本主義化し、生産力においても進歩した資本主義的な農業に變化する。多くの先進資本主義國では、農業は多かれ少なかれ、こうした變化をしてゐるのである。

資本主義化した農業の場合には、地主は農業者から土地の使用に對して地代を支拂はれる。地代は

土地の肥沃度、市場への遠近、灌漑など——と口にいへば土地の生産力——によつて異なるが、英國における一町歩の平均地代は三十五六圓である。農業労働者は工場労働者と同じく賃銀を支拂はれる。農業者は企業者としては利潤を収得し、もしその資本が自分の所有なら、その上に資本に對する利子を得る。英國では、これ等の農業者の經營してゐる借地の一戸當り平均は二十町歩以上であつて、數百町歩の土地を經營する農業者が少なくない。日本の小作農の一戸平均耕作面積は、わづかに七段四畝である。

資本主義の衣裳をつけた農奴制度 　　いづれの資本主義國でも、農業はこれと同じ傾向をたどつて、晩かれ早かれこの状態に達するものではあるが、それと同時にいづれの國においても資本主義が崩壊する以前に、農業が必ずこの程度の變化を終るものとはきまつて居らぬ。或る場合には、大體において同じ傾向をたどつてゐるが、農業技術が工業化し、その經營の形が純粹に資本主義化する作用は、極めて徐々としか進行せぬことがある。

たとへば我國の如き、資本主義の經濟上の壓迫により、土地は急速に大地主の手に集中され、農民は土地から「解放」せられて、無産民化しつゝあるにも拘らず、封建時代から承継した

小作制度と名づける極めて地主に有利な制度があるために、大地主の手に集中せられた土地は再び分割され、小さな小作農によつて耕作せられてゐるのである。

日本の小作制度は、封建時代の農奴制度を、そつくりそのまま存続してゐるものであつて、たゞ異なるところは、領主と農奴との關係に、資本主義社會の一般原則たる自由契約といふ着物をきせただけである。今日、地主と小作人との關係は、對等の人と人との間に結ばれた自由な契約によつて出来あがつた關係であるが、この契約の内容はどうかといへば、征服者たる領主と被征服者たる農奴との昔の關係を、そのままに承継したものである。いな農奴の場合には、少なくとも最低限度の生活だけは保障せられてゐるが、自由な契約のもとでは、この保障だけが無くなつてゐる。即ち今日の小作人は、借金によつて、辛うじて農奴なみの最低生活をしてゐる場合が少なくないのである。

小作人は地主から土地を借り受け、これに自分の資本（種子、農具、肥料などの形で）を投下し、自分の勞働を加へて穀物を生産する。地主に對しては、土地の使用料として一定額の穀

物（時としては貨幣）を支拂ひする。多くの場合、小作の契約には、豊作の時にも小作料を引上げぬ代りに、兎作の時にも小作料を減らさぬことが明らかに書きつけられてゐる。そこで小作人は企業の危険を負ふ代りに、企業の利潤をも收得する。即ち地主に小作料を拂つた残りの穀物は、労働に對する賃銀と、資本に對する利子と、企業の利潤として、小作人はそつくり残らず自分の懐に收めてゐるものである！そこで形式の上から見れば、小作人はいかにも、外國の農業者と同じ種類の企業者であるかのようである。

けれどもこの比較が全然まちがつてゐることは、立派な企業家たる外國の農業者が地主に「支拂つてゐる」地代と、日本の小作人が地主に「納めてゐる」小作料とをくらべてみれば直ぐ分かる。英國の農業者が地主に拂つてゐる土地の平均使用料は、一町歩に對して凡そ三十五六圓であるが、日本の小作人は田一町歩に對して、地主に（米價四十圓、小作料平均一石七升とすれば）四百二十八圓を納めてゐる。即ち外國の農業者は、地主に地代を支拂つてゐるのであるが、日本の小作人は領主たる地主に對して、年貢を納めてゐる。即ち地代のほかに、小作人自

身の投資した資本の利子をも、企業の利潤をも地主に納めてゐる。いな小作人は利子と利潤ばかりでなく、労働賃銀の一部をさへも、小作料として地主に引き渡してゐるのである。そして企業の危険だけを負はされてゐるのが、日本の小作人である。田一町二段、畑三段を耕やしてゐる小作農の一ヶ年の收支は、四十四圓の缺損になつてゐる。（大正九年農商務省の調査）。言葉をかへて云へば、小作人は最低限度の生活費からなほ四十四圓少ない額を引き去つた收穫の全部を、小作料として地主に納めてゐるのである。收穫のうちから、農奴の最低限度の生活費を引き去つた残餘をのこらず領主が取り上げること、これが農奴制度の特色であるが、今日の「自由」な農民——最低生活の保障から解放された自由な農民——自由契約のもとに、資本主義の經濟作用によつて自由にされた今日の農民——は、借金によつて、農奴以上の年貢を納めてゐるのである。

小作農は労働者でないといふ人がある。小作農は近代的な労働者ではなくて、日本の農業そのものが資本主義以前の生産方法であるように、近代的な労働者以前の労働民、即ち農奴に自

由民の着物をさせたものに外ならぬといふ意味においてのみ、小作農は労働者でないといふことが出来る。

小作農の一ヶ月一人の平均食糧費は四圓八十錢（大正九年農商務省調査）であつて、一ヶ月一人の平均生計費は十一圓七十錢（大正十、十一年農務局調査）である。また一日當り労働報酬は七十錢（大正十、十一年農務局調査）にすぎぬ。

農村における階級の分化　それでは自分の土地を自分で耕やしてゐる自作農はどうかといふと、田一町五反、畑六反を耕やしてゐる自作農の一ヶ月の收支は、百八十一圓六十錢の欠損となつてゐる（大正九年農商務省の調査）。日本の自作農が耕やしてゐる耕地の面積は、一戸平均八反二畝にすぎないが、右の計算は現在の農業の生産力では、この程度の廣さの土地を耕やしたのでは、自作農の現在の生活標準が維持できないことを物語つてゐるものである。さりとて、現在自作農の持つてゐる土地を二倍し三倍する方法が、よし見つかつたと假定したところで、現在の農業技術では、一家族の労働力で耕やされる土地の廣さには限りがある。しかもこの限度は極く小さなものである。そこで自作農を救ふ唯一の道は、農業の機械化工業化である

が、これは今日のように、土地が利害關係を異にする小さな所有に分かれてゐる限りは、どうして不可能なことである。しかるに自作農は、小さな土地所有者なのである。そこで彼等は、自分自身が土地の小所有者であるといふ事實によつて、自分自身の唯一の救ひの道を塞いでゐるのである。自作農は僅かにその手に残つてゐる少しばかりの土地を失ふまいとして、しがみ付けばしがみ付くほど、現在の悲惨な運命にしがみ付くこととなる。

自作農の生活費の不足は、いふまでもなく借金によつて補はれてゐる。

大正三年には、土地を抵當や質入した農民の借金は三億五千二百萬圓であつたものが、大正九年には十億二千萬圓になつてゐる。抵當質入以外の負債を合はせると、大正二年にはすでに九億六千萬圓に上ぼつて居つたから、今日は恐らく二十億に近いと云はれてゐる。そしてこの負債の三分の一は、農業資金として用ひるためではなく、生計の困難にもとづいてゐる。（稻村隆一著、『農村問題の現在と将来』）

その結果は、自作農の土地は大地主（大地主の多くは金貸である）や金融資本家の手に集中される。勤儉貯蓄の宣傳、郵便貯金、簡易保険、貯蓄銀行、その他いろいろの方法で、食ふも

のを食はずに僅かに残した農民の零細なはした金が、根こそぎ捲き上げられて大きな金融資本家の手に集められ、農村から都會に運び去られるに従つて、農村の金融は逼迫する。そして農民はますます不利な條件で借金をし、従つて自作農の土地は、一そう急速に大地主の手に集中する。こうして日本全國では、年々およそ一萬戸づゝの自作農は滅亡し、その所有地を失つて或るものは小作農となり、或るものは農村から驅逐せられてゐる。その結果は、耕地所有者全體を通じて見ると、五段未滿の耕地を所有する者と大地主とが增加して、この中間にある中地主の数が減じてゐる。

大正元年と、十ヶ年後の大正十一年との、自作と小作の農家戸数をくらべて見ると、自作農は一、七四四、八〇一戸から一、六四〇、八〇七戸に減じ、小作農は一、五二〇、九二三戸から一、五二二七一二戸に増してゐる。これを農家戸数全體に對する百分率になほして見ると、自作農は三二・〇五%から三〇・六〇%に減じ、小作農は二七・九四%から二八・三六%に増したのである。また大正元年と大正十三年との、耕地所有反別による地主の戸数をくらべて見ると、最下層の五段未滿の小地主は、地主全戸数の四七・七四%から四九・〇五%に増加し、反對の極端にある五十町以上の大地主は、〇・〇六%から〇・二〇%(二、九六三戸から四、九五〇戸)に増し、これにつぐ十町以上五十町未滿の大地主

も、〇・八四%から〇・九六%に増加してゐるが、この兩極端の間にある中地主は、いづれも減少してゐるのである。即ち五段以上一町未滿の地主は、二五・三九%から二四・二八%に、一町以上三町未滿の地主は一八・〇六%から一七・九四%に減じ、三町以上五町未滿の地主(眞實の中流地主)の減少は最も著しく、即ち五・四五%から四・六七%となり、五町以上十町未滿の地主も、二・五七%から二・三五%に減じてゐる。

又大正十四年末の農林省の調査によると、五十町以上の大地主の所有耕地反別は四十萬五千九百三十五町歩であつて、全國耕地の六・七%に當り、全國小作地反別の一四・四%を占めてゐる。此等の耕地を小作する農民戸数は六十一萬九千六百四十九戸であつて、小作農全戸数の四〇・五%に達してゐる。かように日本の農村人口は、いはゆる「農村の中堅」たる中流の社會層が急速に崩壊して貧農の社會層に陥落し、農村の無産勞働民の大群を膨脹する一方には、土地はますます大地主の手に集中されてゐるのである。五反未滿の耕地所有者は、名目の上では地主であるが、その生活の窮迫は小作農と選ぶところがないばかりでなく、五反未滿の耕地はとうてい一家を支えるに足りないから、彼等は自作兼小作農となつて地主の土地を耕やすか、半農業勞働者となるか或はその他の不熟練勞働によつて僅かに生活を支えてゐる、半プロレタリアにほかならぬ。

かように日本の農村は、資本主義の経済上の作用により、ますます大きくなる少数の大地主と、ますますその数を増加する貧農とに分解されてゐる。そしてこの両端の間には、急速に崩壊してゆく中農の社會層がはさまつてゐる。

資本主義の發達に伴ふて、農民は土地から「解放」され、かつては多くの小所有に分かれてゐた土地は、漸次に大地主の手に集中される。多數の農民の收奪と土地の集中とは、農業が資本主義的に經營せられるために必要な準備であり、その掃海事業である。我國においても、土地所有の状態は急速にこの方向を指して進んでゐるが、農業技術と經營の形態の變化とは、この作用の進行にくらべて遙かにおくれてゐる。そこで日本の農業は、土地から解放された農民を、事實上の農奴とし、この農奴的勞働の搾取によつて、僅かに存続してゐるものである。

自作農の維持創設と名づけるアルジョア政黨の政策は、一方においては、農村の階級分化に伴ふ階級意識の發達を緩和し、小所有者を創設することによつて、農村の保守的小ブルジョアの社會層の勢力を増大し、土地の所有によつて農村に縛りつけられた最も従順な小農を増加することによつて、農奴的な農業制度を鞏固にしようとするものである。しかるに他方においては、それは地主に土地を賣

りのく機會を與へ、土地資本を最も有利に商工業資本に轉換する機會を與へようとするものにはかならぬ。現に政府が自作農維持創設の政策を實施した結果、最近、耕地の地價が騰貴したことも事實である。大地主の謂ゆる土地「開放」によつて土地を譲り受けた小作農が、いづれも窮地に立ち、舊地主に減價で買ひ戻しを請求してゐる實例が少なくない。大地主は銀行業者と結托して、これ等の土地を、賣り渡した値段以下で買ひ戻してゐる實例さへもある。

農村の階級 資本主義の下においては、農業は工業と對立し、農村は都會と對立する。

一切の文化と富力とは都會に集中し、農村は必然に荒廢する。そこで人々は、全體としての農村（ないしは農業）の利害を、全體としての都會（ないしは工業）の利害と對立させて考へる。ことにブルジョアとその代辯者らは、農村における階級對立の事實を蔽ひかくさんがために、ことに、そして都會と農村とにおける、無産勞働民の共通の利害を蔽ひかくさんがために、ことに全體としての農村の利害と、全體としての都會の利害との對立を強調するのである。しかしながら階級的に分化した今日の農村には、地主の利害があり、中農の利害があり、貧農の利害はあるが、農村全體としての、共通の利害なるものはないのである。

大地主の階級

大地主は小作料の名のもとに、實際の耕作者たる農民から地代を取るばかりでなく、農奴制度の變形物である小作制度のお蔭で、農民の農奴的生活費以外の一切の收穫を取り上げて生活する。従つて彼等は、資本主義以前の農業制度たる現在の制度を維持し、農民を永久に農奴としておく事を利益とする。従つて大地主は、現在の社會に残つてゐる封建時代の遺物を代表する勢力であつて、すべての階級のうちに、最も保守的・反動的な階級である。

大地主の經濟上の利害は、資本家の經濟上の利害と必ずしも一致せぬ。彼等は互ひに利害を争ふてゐる。しかしながら資本主義が發達して帝國主義の段階に進み、都會のブルジョアが、もはや革命的進歩的な勢力ではなくなつて、反動主義化してくると、それは農村の反動勢力たる地主階級の力を借ることが、ますます必要になつてくる。ことに工業プロレタリアと貧農との間に、共通の階級意識が發達してくると、この共通の脅威に對して、彼等は双方の側から、提携の必要を認めてくる。都會のブルジョア階級は、經濟上の利害についても、時として、地主階級に若干の讓歩をする（たとへば地主に有利な關稅の改正など）のみならず今日の大地主

は、單なる土地の所有者にとどまらないで、同時に銀行の重役であり、工業上の企業者たる場合が少なくない。不在地主がふえるに従つて、この傾向はますます増大する。この範圍においては、彼等は利潤といふ血によつて、都會の兄弟とつながれてゐる。しかしながら地主としての彼等の經濟上の利害は、依然として工業資本家の利害と相い反してゐる。けれども當面直接の經濟上の利害の相い反してゐる瞬間にも、現存の社會的秩序を維持するといふ彼等の政治上の利害においては、完全に一致することができる。彼等は鞏固な聯合を結んで、工業プロレタリアと貧農との勢力に對抗する。そこで貧農の立場から見れば、ブルジョア階級とプロレタリアとを打つて一丸とした都會（ないしは工業）の利害なるものは存しない。またこれと對立した、地主と貧農とを打つて一丸とした農村（ないしは農業）の利害なるものも存しない。地主階級の利害は、工業プロレタリアと貧農との利害と正反對に立つてゐる。

中流地主の利害は、大體において大地主の利害と一致する。それ故に、彼等は大地主の政治的指導によつて率ゐられ、工業プロレタリアと貧農とに對する反動的な勢力である。

自作農の階級

自作農はその経済上の境遇においては、小作農と大差はない。自作農は小作農にくらべて、一般に、生活標準は幾分高いにはちがひないが、これに伴ふ社会的地位を維持する必要は、彼等をしばしば小作農以上の窮地に陥入らしめてゐる。それにも拘らず、彼等は不幸にして、一と片の土地を持つてゐる。彼等がこの名目にすぎない土地の所有から解放せられぬ限りは、完全に地主の心理から解放せられることはできぬ。

自作農は都會の手工業者と同じく、過去の生産方法の遺物である。彼等には、獨立の所有者たる誇りがある。この誇りが彼等の手からすべり落ちようとすればするほど、彼等はますますこれに執着する。自作農には労働者としての意識よりも、獨立の企業家、利潤の取得者としての意識がはるかに強よい。従つて彼等は、穀物の賣り手としての立場に立つ。穀物の賣り手としての経済上の利害は、都會の工業資本家の利害とも、工業プロレタリアの利害とも相い反してゐる。従つて穀物の賣り手としての自作農は、全體としての農村の利害を、全體としての都會（ないしは工業）の利害と對立させて考へる。この立場は、農村の内部における階級利害の

對立を、彼等の目からかくしてゐる。従つて自作農の最大部分は、現に大地主階級の指導によつて率ゐられてゐるのである。

しかしながら自作農の経済上の利害は、必ずしも大地主のそれと一致せぬ。現に彼等の手から取り上げられた土地は、金融資本と聯合した大地主の掌中に集中しつゝある。ことに自作農の階級は、急速な崩解作用にさらされてゐる。彼等の間からは、年々一萬戸、八萬の人口が、無産民の群れにおちこんでゆく。かような経済状態は、都會の小ブルジョア分子と同じように、この農村の小ブルジョア分子をして、社會上政治上の問題に對して、極めて消極的な態度を取らしめる。彼等は大地主に追従する勢力としても、大地主に對抗する勢力としても、極めて消極的である。

自作農のかような性質の結果として、反動的ブルジョアジーに對するプロレタリアと貧農との闘争に對して——少なくともその重要な瞬間に——彼等を中立せしめることは（彼等の本來の保守的小ブルジョアの性質にも拘らず）決して望みのないことではない。ことにブルジョア

ジューがデモクラシーの革命を完成して居らぬ後進資本主義國においては、この社會層には或る程度まで、反動的な大地主に對する反對勢力として働らく力が残つてゐる。工業プロレタリアと貧農とは、自作農の利害が大地主の利害と一致せぬ範圍においては、大地主の階級に對する彼等の闘争を支持しなければならぬ。

自作農の下層は、事實上の貧農であつて、半小作農ないしは半農半労働者にほかならぬ。従つてこの社會層は、プロレタリア及び農村無産民との間に、共通の利害をもつてゐる。従つてプロレタリアの解放運動は、彼等を小ブルジョアの影響から引き離して、無産大衆の陣營に獲得することに努力しなければならぬ。

小作農の階級 資本家的農業者に雇せられる純然たる農業労働者のいくばくもない日本においては、小作農は農村における代表的労働民である（小作農の多くは、臨時の日傭農業労働者である）。

農業の生産力に變化がない限り、小作農の労働に對する報酬は、地主が多く取るか少く取るかによつて決定する。従つて、地主と小作農との利害は相い反してゐる。

農民としての小作農の經濟上の利害は、工業民としてのプロレタリアの利害と相い反するといふ人がある。たとへば穀物の賣り手としての小作農の利害は、穀物の消費者としての労働者の利害と相い反する等々々々。しかしながら精密な計算は、米價の騰貴が、必ずしも小作農の利益でないことを證據立てゝゐる。少なくとも、穀物の賣り手としての小作農の利害は、これを工業プロレタリアとの共通の利害にくらべたなら、極めて小さな分量であつて、現に小作農自身といへども、穀物の賣り手としての立場を取らうとせぬ。それ故に、彼等はその收入を利潤として計算しないで、労働賃銀に引き直ほして計算するのである。

かりに小作農と労働者との間には、當面直接の經濟上の利害においては、或はたま／＼相い反するものがあり、少なくとも積極的には一致せぬ項目があるとしても、これは労働者と農民との、階級的一致を妨げるものではない。當面直接の經濟上の利害をいへば、同じく工業労働者の間にも、たとへば職業を異にするに従つて異なる場合がある。現に工業労働者の間に職別組合の發達する餘地のあつたのはそのためである。若し労働者が、たとへば單に當面直接の經濟上の利害を最終の目的として追求し、

その闘争が、こうした利害の闘争以上に發展しないなら、それは階級意識と階級闘争とに導びくものではなく、必然に職別組合主義に到達するものである。

工業プロレタリアと小作農

もし小作農を工業労働者と區別する理由があるならば、それは小作農が利潤を収得する企業者であるからではなく、したがつてまた、地主と經濟上の共通の利害を持つてゐるからではなくて（外國の大地主と借地人たる資本家的農業者との間には、地代の争議が起らぬばかりでなく、彼等は提携して農業労働者に當つてゐる）、それは近代的労働者の發生以前から存在した労働民であつて、その労働條件は、近代的な工場労働者よりも遙かに劣つてゐるといふ點にある。

小作農は労働をもつて唯一の生活の方法とする純然たる無産労働民であると同時に、近代的な工業プロレタリアとは、いろいろの點で異つてゐる。工業プロレタリアは、近代的な大工業と大生産の上に立つてゐるが、小作農は資本主義以前の經濟組織の特徴たる、中世的な小生産の上に立つてゐる。即ち工業プロレタリアの經濟的基礎は、たゞ一步にして社會主義に導びく

ものであり、農民の經濟的基礎は、完全に資本主義にすらも達して居らぬ。工業プロレタリアは、比較的狭い地域に集合して密集部隊をなしてゐるが、小作農は廣い地域に散在して、接觸の機會に乏しい。工業プロレタリアは、労働そのものによつて、協同動作と團體的訓練を得てゐるに反して、農民の労働には、この機會がない。農民の環境は小ブルジョアの個人主義的であるが、工業プロレタリアは労働の過程そのものから、集團主義を教へられ、プロレタリアの進むべき針路を教へられてゐる。況んや小作農の場合には、少なくとも企業の責任を負はしめられ、地主に代はつて資本（種子、肥料、農具など）を立替へしめられてゐるために、獨立の小企業者たる外環をさへも與へられてゐる。少なくとも地主と農民との關係は（それが前時代の領主と農奴との關係の變形であるために）工場における資本家と労働者との關係ほどに、階級対立と労働搾取の事實とを、鮮明に現はして居らぬ。したがつてそれだけに、小作農が工業労働者と共通な階級意識の同一水平に達し、解放戦の同一戦線に立つたためには、より多くの覺醒と、意識的努力とを必要とするのである。そしてこれがまた、資本主義の下における階

級闘争において、工業プロレタリアが指導的な任務を負はなければならぬ所以である。それと同時に、農民が人口の多数を占める後進資本主義國においては、貧農階級は資本主義に對する反對勢力として、解放戦の重要な要素であつて、この階級の協力なくしては、プロレタリアの決定的な勝利は望まれぬ。

農民組合

労働組合が被搾取者としての、工業労働者の共通の經濟的利害を基礎とする團體であるように、農民組合は、被搾取者としての小作人の共通の經濟的利害を基礎とする、大衆的の組織である。したがつて労働組合の闘争の目標が、直接には資本家の經濟上の搾取であるように、農民組合の闘争の直接の目標は、地主の經濟上の搾取である。労働組合の運動は、労働條件の維持改善に出發し、農民組合の運動は、小作條件の維持改善に出發する。

労働組合の闘争と職分とが進化したように、農民組合の闘争と職分もまた進化する。小作農の當面直接の經濟上の利害を擁護するための闘争は、やがて地主の搾取から、完全な解放を獲得しようとする農民の闘争に發展する。そしてこの闘争は、資本主義社會におけるすべての被

搾取労働民の完全な解放を目的とする闘争の一方面であり、有機的なその一部分であるといふこと（農民の完全な解放そのものが、すべての被搾取労働民の完全な解放によつてのみ、初めて實現するものだといふこと）、なかんづく農民の解放運動は、工業プロレタリアの解放運動と相い補足して、初めて完全な一つの階級的の運動をなすものだといふことが、明白に農民の意識に映じてくる。農民組合は、もはや或る地主に對して、或る小作農の或る經濟上の利害を擁護する闘争の機關といふだけではなくて、眞實の意味での階級闘争の有機的な一部をなすところの組織に進化するのである。そこで今日の農民組合は、無産階級の全般的の目的、階級的の目的のためにする闘争——即ち眞實の意味での階級闘争——の一過程として、或は一方面として、小作農の當面直接の利害のために戦ふ闘争の組織となつたのである。

階級闘争の意識の上に立つた農民組合は、地主の搾取に對する當面直接の利害によつて小作農の大家をこの闘争に動員し、この闘争によつて、農民大家を無産階級の歴史的使命に教育する。農民組合はまたこの闘争によつて、散在孤立の生活をしてゐる農民を團體主義に教育し、

團體的に訓練し、個人主義的經濟と小ブルジョア的環境の支配から農民を思想的に獨立させ、彼等を工業プロレタリアと同一の階級意識に引き上げる。農民組合はまた工業プロレタリアの組合と同じく、一面においては資本主義に對する闘争の機關であると同時に、この闘争の組織によつて、新しい社會における新しい農業の基礎を準備してゐるものである。

日本の歴史は、領主に對する農奴の闘争をもつて満たされてゐる。現在の小作制度は、農奴制度の變形したものにほかならぬ。けれども如何なる國、如何なる時代の農奴といへども、領主に對する闘争を階級闘争として明白に意識し、この闘争を恒久的な農民組合運動に組織化する偉大な能力を現はしたものはないのである。これは日本の小作農が農奴に均しい地位におかれてゐるにも拘らず、あらゆる國あらゆる時代の農奴の夢想だもしなかつた、歴史的使命を負ふてゐることを物語るものである。

しかしながら労働組合にせよ農民組合にせよ、その直接の職分とするところは主として經濟上の闘争であつて、その行動の領分は、主として經濟闘争の場面にある。すべての階級闘争は

政治的の闘争である。そしてすべての經濟闘争は、眞實に全階級的な目的をもつた階級闘争に發展しなければならぬ。したがつて、主として經濟闘争を行動の領分とする組合の組織は、無産階級解放運動の極めて重要な組織ではあるが、尙ほかつ決して自足的、萬能的な組織でないことを忘れてはならぬ。

第七講 無産階級の政黨

組合主義の政治運動

労働者は、日常の経済上の利害のために資本家と闘つてゐるうちに自分の前には、資本家階級の政治権力といふ大きな力が立ち塞がつてゐることを悟つてくる。

そして労働階級が完全な解放を得るためには、どうしても、この大きな力と闘はねばならぬことを悟つてくる。小作料が高い安いから出發した農民もその通りに、この闘争を進めてゆくうちに、同じ事實と考へるとにたどりつく。そこで労働者と農民との政治運動が生まれてくる。

しかし人々が普通に、無産階級の政治運動とか労働階級の政治運動とかいつてゐるものの中には、實際には、すいぶん性質のちがつた運動を含めてゐる。

たとへば八十年ばかり前の英國の組合運動者は、議會における進歩的な代議士の間運動し彼等を動かして、労働組合や労働者に有利な法律の制定につとめたが、この種の運動も、労働

者がやつた政治運動にはちがひない。けれどもこの種の政治運動は、労働者の目前の経済上の利害を擁護するとか、組合の法律上の立場を有利にするとかいふこと以上には、労働階級の歴史的使命についてもその闘争の目標についても、何等のはつきりした意識をもたない當年の組合運動者が、かような立場から、通俗な意味での謂ゆる「政治」に手を出したといふまでであつて、それは資本家階級の組織せられた政治権力こそ、労働者を階級的に支配してゐる力であるといふ意識にもとづいたものでもなく、従つてこの組織せられた力と徹底的に闘はうとしたものでもない。即ち、それは最も發展した階級闘争といふ意味での、無産階級の政治運動といふべきものではないのである。

この運動がもう一段進歩して、労働者は、ブルジョア政黨の代議士にたよつてゐたのでは駄目だといふことを知り、労働者の獨立の候補者を推し立てるようになり、この労働議員が中心になつて労働者の政黨が出来るようになる、これはたしかに、無産階級の政治運動へ幾らか進んだものではあるが、この運動の本質は、まだ先きの場合と異つては居らぬ。即ち政治

と政治闘争に對する根本的の考へにおいて、依然としてブルジョアの見解と、ブルジョアの政治意識とにもとづいた政治運動なのである。

社會民主主義の政治運動 次には、労働階級の完全な解放を目標とし、搾取と被搾取との關係の上に立つて居らぬ社會の實現を目標とした政治運動がある。多くの先進資本主義國では封建制度に對するブルジョアの革命により、政治上には、或る程度までデモクラシーが行はれるようになった。デモクラシーのもとにおいては、多數の意志が政治を支配する。しかるに労働階級は、社會の多數である。労働階級はデモクラシーによつて、完全な解放を得ることができ。即ち労働者は、その代表者を議會に選出し、議會で必要な法律さへ制定すれば、労働階級はこのデモクラシーのお蔭で、法律によつて與へられてゐる政治上の自由の範圍内において、大手を振つて、平和のうちに、階級としての目的を成就することが出来る。これがこの政治運動の根本思想である。

この政治運動は、労働者が究極の解放を目的として、資本家や地主とは別個な政黨を組織して政權に近づかうとする運動であるから、さきに述べた政治運動よりも、遙かに進んだ政治運動にはちがひない。けれどもこの政治運動は、プロレタリアはブルジョアの政治勢力と闘はねばならぬといふところまでは認めてゐるが、この闘ひは、デモクラシーといふグラウンドで、國家といふ階級を超越した公平な審判官のもとに、この二つの政治勢力が謂ゆる「紳士的な競技の精神」で仕合ひをすることであると解してゐる。これはまさしくブルジョアが現在の政治勢力の關係について、無産階級に信ぜしめようとしてゐる思想である。だからこれはブルジョアの政治思想であつて、プロレタリアの政治思想ではないのである。

この種の政治運動は、先進資本主義の或る國々では、相當に有力な運動となり、その政黨は議會に多數の代議士を送つてゐる。また労働階級の多數がこれを支持してゐるといふ意味では労働階級のやつてゐる政治運動にはちがひない。しかしながらデモクラシーのグラウンドで、ブルジョアジーの選手が「紳士的な競技精神」で敵に譲る得點には、限りがある。即ち工場法規の改正や、労働者に對するいろいろの保險制度の實施などがそのすべてであつて、これ等の

級的的目的のために働らいてゐるとは限らない。ブルジョアまたは小ブルジョアの性質の政黨によつて指導せられてゐる場合には、それは却つて、ブルジョアの階級的的目的のために働らいてゐることになる。

日本の無産政黨　わが國では、無産階級分子によつて獨立の政黨を組織しようとする運動は、わづかにその發端を見たばかりである。この運動は、「全階級的單一無産政黨」といふ標語によつて起つたものである。

單一無産政黨とは、單なる組合主義者からプロレタリアの前衛分子にいたるまで、工業労働者から農村の貧農、ブルジョアの政治的指導から離反したその他の無産労働民と、資本主義社會における抑壓せられてゐるすべての社會層とにいたるまでの、あらゆる無産階級的な要素——ブルジョアに對する反對勢力であるといふ意味で無産階級的な要素——をそのうちに包含しようとするものであつて、こゝに單一無産政黨の特殊な性質があり、従つてまた特殊な意義がある。そこで吾々の無産政黨が、かような性質の政黨に發達したならば、勢ひそのうちには、幼

稚な組合主義者の政治意識や、わづかに小ブルジョアの意識から離脱しかけたばかりの政治思想から、X X Xプロレタリアの政治意識にいたるまでの、階級闘争に對する意識のあらゆる發展段階を包含する政黨となるのである。かような政黨は、私がさきに例示した政治運動のいづれの型にも、精密には一致せぬものである。それはあらゆる無産階級的な要素を結合した無産大衆の大衆的な黨派（無産階級の前衛の黨派ではなくて）であるといふ意味で、無産階級の政黨なのである。

單一無産政黨のかような性質は、日本の現在において、無産階級が負はしめられてゐる階級的任務に一致するものである。

單一無産政黨の任務　日本の政治のうちには、資本主義以前の反動勢力が、なほ澤山に残つてゐる。これは先進資本主義國では、ブルジョアジーの支配とその政權を確立するために、まだ革命的な性質をもつてゐた當年のブルジョア自身が、或る程度までこれを一掃し、プロレタリアのためにその道を清よめて呉れてゐるのである。のみならずこの資本主義以前の反動勢

力の残存物は、今日では完全に、反動化したブルジョアジーの勢力と結びつき、その重要な一部分となつてゐる。

ブルジョアジーが資本主義以前の反動勢力を一掃し、専制政治を倒して政治上のデモクラシーを導びき入れた國々においても、ブルジョアジーにはこのデモクラシーを徹底的に遂行する力がない。なぜならば、ブルジョアジーが資本主義以前の勢力に代はつて一度び政治上の権力を掌握することになると、デモクラシーの徹底は、今度はブルジョア自身の支配を危うくする顧慮になるからである。そこでブルジョアジーは、資本主義以前の反動勢力に對するデモクラシーの闘争に無産大衆の力を動員して、一度びその政權を確立してしまふと、この瞬間から、自分自身が動かし始めたこのデモクラシーへの大衆の運動に、ブレーキをかける保守的・反動的な勢力となり始める。であるからブルジョアジーが可なりの程度まで政治上のデモクラシーを導びき入れたこれらの國々においてさへ、このデモクラシーを徹底せしめる力は、たゞ新興の階級——ブルジョアジーの脚元から驅起してこれと闘争し、これと支配を争ふ新興の階級——

即ちプロレタリアのみがもつてゐる。

しかるにブルジョアジーが、ほとんどデモクラシーを發達せしめることなくして早くも老衰し、反動化し、そして資本主義以前の反動勢力と抱合してしまつたわが國の場合には、デモクラシーを發達させ、これを完成せしめる任務は、とくに無産階級の上にかゝつてゐると云はねばならぬ。そこでブルジョアジーに對する無産階級の政治上の闘争は、デモクラシーの闘争——ブルジョアジーが中途で遺棄したこのデモクラシーの闘争を拾ひ上げ、このデモクラシーを徹底せしめるための闘争——といふ形を取るのである。政治上のデモクラシーを指して、吾々はブルジョア・デモクラシーと呼ぶことがある。しかしブルジョアジーの支配の下では、ブルジョア・デモクラシーを徹底せしめる闘争が、眞實にブルジョアジーの政治勢力と闘ふことになり、また眞實にブルジョアジーと政權を争ふ闘争に發展するのである。

これは日本の無産政黨は、アモクラシーの獲得といふ抽象的概括的な要求のみをかゝけて運動しなければならぬ、といふ意味ではない。無産政黨は労働者や農民の經濟上の利害をも、政治の場面に

いて代表し擁護しなければならぬことは無論であつて、労働者や農民の経済闘争をも擁護し、時としては組合運動の別働隊ともなつて、組合運動のためにその進路を切り開く任務をさへも負ふべきものである。かつて議會解散請願運動の標語のうちに、『耕作権の確立』といふ要求項目のかゞげられてゐるのを見て、これは農民の経済上の利害にもとづく経済闘争——組合主義の闘争——の標語であつて、『全階級的』な無産階級政治運動の指導精神にもどつてゐる。請願運動が大衆動員に失敗したのは、かような組合主義的指導精神にもとづいた大運動だつたからである。と主張した人々があつた。かくて組合主義を揚棄し、全階級的政治意識を揚棄し、失敗の原因を追跡究明したあとで、正しい指導精神と新しいテーゼともとづく新たな運動が、いかに大衆の動員に成功したかについては、私はまだ聞及んで居らぬ。たゞし或る形勢と條件との下において、議會解散請願運動の標語に、『耕作権の確立』の要求を加へることが妥當であるか妥當でないかは別問題として、かゝる要求にもとづく運動は農民の経済闘争であり、組合主義政治運動であつて、全無産階級政治行動でないとは考へるのは、経済闘争と政治闘争とを、全く別々の相ひ対立したものとして理解してゐる根本的な誤謬にもとづいてゐる。この種の見解にしたがへば、無産政黨は、畢竟、アモクラシーの獲得と云ふ抽象的概括的な要求を繰り返へすこと以外に、一步も出られぬこととなる。

無産政黨の第一の任務は、このブルジョアジーの反動勢力に對して、一切の反動勢力を、最

も小さい破片にいたるまで残らず動員して、単一な戦線に組織することである。この意味において、わが國の無産階級の歴史的任務に照應した政黨は、単一政黨である。であるからまたその陣營のうちには、工業プロレタリアと共に農民を包容し、プロレタリア運動の左翼と共に右翼を包容し、組合主義者と共にプロレタリアの前衛をも包容しなければならぬ。ただに労働者と小作農ばかりでなく、苟もその綱領のもとに集り、そして反動的ブルジョアジーに對する反對勢力となるところの都市と農村との半プロレタリアと、小ブルジョアの最下層と、中間的な社會層をも包容しなければならぬ。そこで無産政黨は、いろいろな段階の階級意識をもつてゐる無産階級要素、いろいろな階級闘争の發展段階を代表し、したがつていろいろな政治闘争の意識といろいろな最終目標とをもつてゐる無産階級と準無産階級とのあらゆる要素が、反動的ブルジョアジーの政治勢力といふ共通の闘争目標のために結合するものである。この意味において単一無産政黨は、これらの諸要素の間の協同戦線黨なのである。

無産階級運動の右翼分子と左翼分子とを一つの政黨に包容することは、不可能だといふ人がある。

そして右翼分子は、この不可能の原因を、左翼分子の責任に歸するものが常である（外國においても日本においても、政黨の場合も組合の場合も）。しかしながら實際においては、多くの場合、政黨や組合の内部において、少数派としての不利な立場を忍んでゐるのは、右翼ではなくて何時でも左翼である。そして分裂の原因となるものは、多くの場合、多数派たる右翼に、少数派として左翼が存在するをゆるす雅量（或は自信のない）ことである。左翼はその主張と政策との正しいことを信じてゐる。したがつて、大衆がその政策と主張を支持するにいたること、そして未來の多数派となる自信をもつてゐる。それ故に、少数派たる現在の立場を忍んでゐる。これに反して、その政策と主張とに自信のない改良主義者や協調主義者は、いつかは大衆の支持を失ひ、指導權が左翼の手に移ることを恐れてゐる。それ故に、彼等は左翼に對して、少数派としての存在さへも許すまいとするのである。左翼と右翼とが一つの政黨（または組合）に結合することが不可能な場合は、多くの場合、右翼の恐怖がその原因となつてゐる。

單一無産政黨の基調——労働者と農民との結合
 は、工業労働者と小作農との結合である。

工業労働者と農民との利害は、必ずしも一致せぬ。したがつて労働者と農民とは、別々の政

この結合の核心となり、基調となる結合

黨を組織しなければならぬ、といふ人がある。

しかしながら労働者には労働者の利害があり、農民には農民の利害があるといふ場合には、百のうちの九十九までは、労働者の経済上の利益が農民の経済上の損失となり、これと反對に農民の経済上の利益が労働者の経済上の損失となる——即ち労働者と農民との経済上の利害が積極的に相反してゐる——場合ではなくて、たゞ積極的に共通して居らぬといふ場合にほかならぬ。たとへば労働者が工場において、賃銀一割増額のために資本金と闘つても、その結果が、たゞちに小作料の一割減額となるわけではない。その通りに、農民が込米廢止のために地主と闘つても、その結果がたゞちに、工場の残業時間の短縮となるわけではない。こゝにいふ意味ならば、労働者と農民との目前の経済上の利害は、必ずしも共通する場合のみはない、といふことができる。

のみならず、労働者と農民との眼前の経済上の利害は、時としては積極的に相い反するものがあると假定しても、これは政治上の闘争において、労働者と農民とが單一の戦線に立つこと

を、少しも妨げるものではないのである。

日本の社会における、資本主義以前の反動勢力は、第一に地主の階級である。しかるにこの地主階級と資本家階級との反動勢力が結合して、今日の反動的な政治勢力が出来上がつてゐるのである。それ故に、農民は資本家階級の政治勢力と闘ふことなしには、地主階級の政治勢力と闘ふことはできぬ。その通りに、労働者は、地主階級の政治勢力と闘ふことなしに、資本家階級の政治勢力と闘ふことはできぬ。

そこで資本家と地主といふ搾取階級を取り除けにして、労働者と農民との経済上の利害のみをくらべるなら、その間の相異が浮き出してくる。これに反して、資本家と地主を一緒にした搾取階級に對立させて、被搾取階級たる労働者と農民とをくらべるなら、初めてその間の一致が浮き出してくるのである。そこで労働者と農民との間に、利害の一致を見るのが階級的な見方であつて、利害の相異を強調するのが、非階級的の見方である。

無産階級はあらゆる問題について、率直大膽に階級的の見方をし、ブルジョアはあらゆる問題について、階級を超越した見方をするような振りをする。少なくとも労働者や農民に向つては、そういう見方をすることを要求するのである。なぜならば彼等は、今日の社会がブルジョアの階級的支配の社会であり、ブルジョアとプロレタリアとの利害の對立した階級對立の社会であるといふことは、なるべく労働者と農民との眼から、蔽ひ隠くしておかうとするからである。

したがつて資本家と地主の階級と、彼等の傭兵と代辯者と御用學者らは、労働者と農民との利害の相異を強調し、都會と農村、工業と農業との利害の衝突を力説し、資本家と労働者とを含めた都會の利害、工業の利害（實際には、そんなものはどこにも存在して居らぬが）と對立させて、地主と農民とを一緒にした農村の利害、農民の利害なるものが、存在してゐるかの如くに主張するのである。

そこで労働者は労働者の政黨に、農民は農民の政黨に結合し、その上で提携協力するのが當然だといふ主張は、第一には工業労働者と農民との政治勢力が、鞏固な單一な戦線に固まり、

資本家と地主との政治勢力に對する有力な反抗の力となることを喰ひ止め、第二には、かくすることによつて、小作農やその他の貧農の勢力を、地主階級の政治勢力を強める道具に使はうとするものに外ならぬ。

無産政黨とその他の社會層　しかしながら無産政黨は、組合に組織せられた労働者と小作農との結合にとどまつてはならぬ。即ち無産政黨は、組織せられた無産階級分子と、組織のない無産階級分子とを結びつけるものでなければならぬ。組合に組織せられた労働者と小作農とは、すべての労働者と小作農とのうちの少数である。のみならず、無産大衆のうちには、組合の運動が相當に發達しても、その組織のうちに包容することの困難なもの、または不可能なものも少なくない。無産政黨はこれらの未組織無産大衆を、ブルジョアの政治勢力の影響に任せておいてはならぬ。無産政黨は、これらの無産大衆に向つて、たゞに門戸を開いておくといふばかりでなく、積極的にこれを獲得しなければならぬ。

小自作農、小商人などのような、小ブルジョアの最下層、中間的な性質をもつた自由職業者と知識分子、事實上の賃銀労働者にほかならぬ一般俸給生活者、教員などの如き要素に對しても、無産政黨は決して冷淡な態度を取つてはならぬ。これらの要素は、プロレタリアの政治的指導の下にあつては、ブルジョアの反動勢力に對して反動勢力となり得るものであると同時に、彼らは無産階級的な指導に失望した場合には、反動勢力となる恐れのあるものである。そこで無産政黨がこれらの要素に對して門戸を開くべきことは勿論であるが、さらに進んで彼等に働らきかけ、彼等をブルジョア階級の思想上政治上の支配から引き離して、無産階級の陣營に獲得しなければならぬ。

しかしながら無産政黨は、如何なる場合にも、これ等の要素をことごとく、現實にその黨員とすることはできぬ。けれども無産政黨は、黨外にあるこれ等の一切の要素——即ちいやしくも反動的ブルジョア階級に對する反動勢力となる一切の無産者及び半無産者の大衆、ならびにこれに近い社會層との間に、政治的指導力を擴大しなければならぬ。

かくて無産階級運動の左翼と右翼、工業プロレタリアと貧農、組織せられた労働者と農民と

共に、組織をもたない一切の無産階級要素——ブルジョアジーの反動勢力に對する一切の反動要素——を有力にして鞏固な政治上の戦線に築つき上げ、單一無産政黨の旗の下に、ブルジョア政黨によつて組織せられた××××××××代るべき、労働者と農民××××××向つて進軍するのである。

大衆的政黨と前衛分子　かように日本の現在において最も必要なことは、一方には無産階級のあらゆる要素を、ブルジョアジーの反動的な政治勢力に對する單一な戦線に組織し、いやしくもブルジョアジーの反動勢力に對する反動勢力となり得る一切の要素と一切の社會層との上に、その影響と指導を擴大することである。

それと同時に、プロレタリアの大衆の間に、眞實に××××××プロレタリア政治意識をもち、眞實にマルクス主義的な洞察力をもち、眞實に弾力性のある戦術をもち、眞實に全階級な政治闘争の指導力となるべき練達した前衛を結成することである。この二つの作用があい伴はないでは、プロレタリアはその使命を完うすることができぬ。

この二つの作用は、或る形勢の下においては、相前後して別々の時期に進行する。またこの二つの作用が同時に進行する場合にも、或る時期においては、主として一方の作用が進行する。しかるにわが國の形勢は、この二つの作用が同時に進行することを要求し、かつ一方のために他方を犠牲にすることをゆるさない。この二つの作用が同時に進行しなければならぬところにわが國における現在の形勢の特質があるのである。

けれどもこの二つの作用は、決して相い容れないものではない。いはんや相ひ反したものである。第一の作用のために第二の作用を犠牲にすることが、さくべからざる「必然」であるかの如く考へるのは、この二つの作用を對立した作用として理解する能力しかないことを暴露したものであるばかりでなく、同時にそれは正しい道に伴ふ困難と努力とを回避して、最も骨の折れない道を選ばうとする口實に外ならぬ。これに反してこの二つの作用の間には、引き離なすことのできない相互の關係がある。前衛の眞實の成長は、たゞ大衆との關係においてのみ行はれるものであつて、大衆的な單一政黨の形成といふこの當面の任務と課程を完全に遂行す

昭和五年五月十日 印刷
昭和五年五月廿日 發行

〔價五十錢〕

東京市麹町區麹町八丁目二十番地

編輯發行
兼印刷人

塚 眞 柄

東京市麹町區有樂町一丁目四番地

印刷所 早瀬印刷合資會社

發行所 東京麹町八丁目二十番地
振替東京二四六二六番 無

産

社

1,000 (1)

| | | |
|--------|----------------------------|---------|
| 猪俣津南雄 | 日本無産階級運動の批判 | ...10 |
| ハインドマン | 社会進化の過程 |15 |
| 〇 山川 均 | 辯證法的唯物論とは何か | ...10 |
| 近藤榮藏 | プロレタリア政治学 |60 |
| 山川 均 | 新方向轉換 <small>(最新刊)</small> | ... 50 |
| ✓ 近藤榮藏 | 新労農黨批判 <small>(新刊)</small> | ...20 |

| | | |
|-------|---------|---------|
| 近藤榮藏著 | 失業と無産階級 |15 |
|-------|---------|---------|

□ 近 刊 書 □

| | | |
|---------------|------------------------------|---------|
| ✓ 無産社編 | 何から読むべきか <small>(改版)</small> | ... 30 |
| 高瀬 清 | 金解禁と無産階級 |10 |
| 無産社編 | 無産者歌集 |30 |
| マルクス著 堺利彦譯 | 共産黨宣言 |60 |

□ 小形パンフレット □

| | | |
|-------|--------|---------|
| 小伏濱太郎 | 今の世の中 |10 |
| 堺利彦 | いかげ松 |10 |
| 堺利彦 | 一休と自來也 |10 |

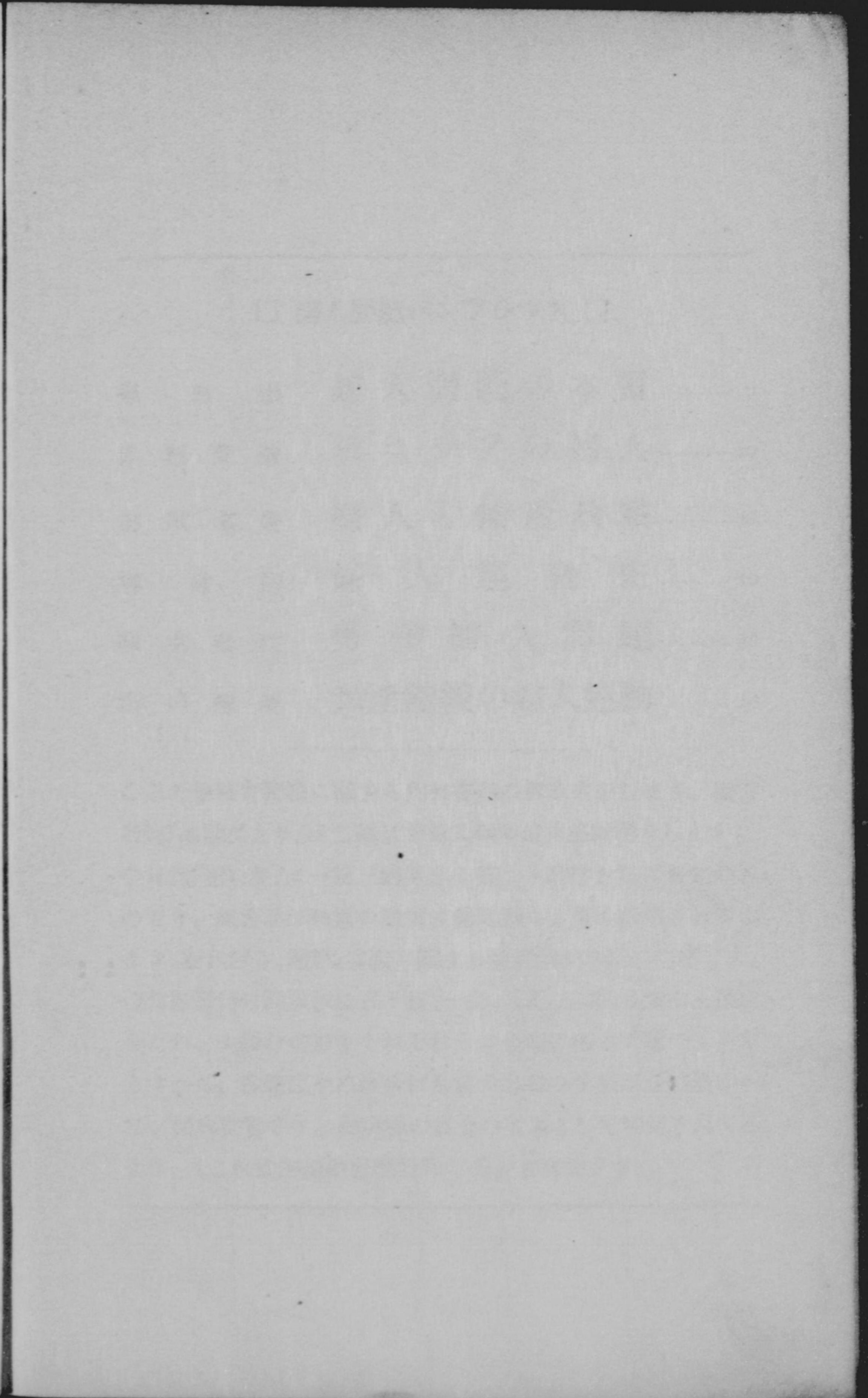
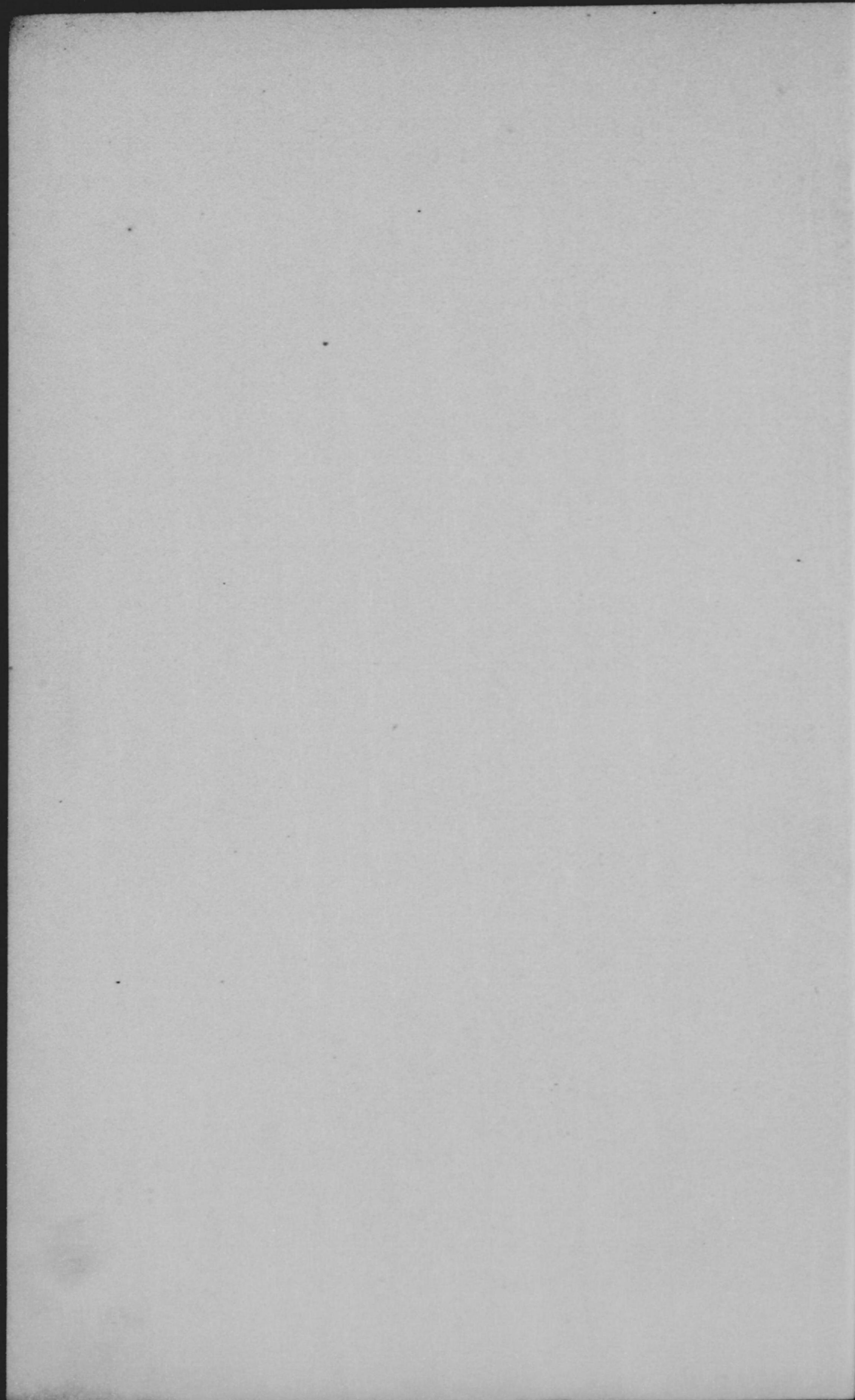
□ 無 産 社 出 版 書 □

| | | |
|---------------|--|---------|
| 堺 利 彦 | 社会主義大意 |10 |
| ✓ マルクス | 労働と資本 |15 |
| パンネコツク | 社会主義と進化論 |20 |
| ✓ マルクス | 利潤の出處 |20 |
| ✓ 堺 利 彦 | 社会主義學說大要 |30 |
| マルクス | ゴタ綱領批評 |20 |
| 堺 利 彦 | バリコンミユンの話 |20 |
| ルクセンブルグ | ロザの手紙 |20 |
| ✓ マルクス | 唯物史觀要約 <small>(獨英和)</small> 資本蓄積傾向 <small>(譯對照)</small> |30 |
| レーニン | 左翼小兒病 |30 |
| 堺 利 彦 | ロシヤ革命十一月七日 |20 |
| 堺 利 彦 | 唯物的辯證法の話 |10 |
| ミュウレン | 赤い少年 <small>(無産者童話)</small> |50 |
| 山 川 均 | 私は斯う考へる |20 |
| ✓ 荒 畑 寒 村 | 労働運動と理論闘争 <small>(絶版)</small> | ...10 |
| ソ ラ | ジエルミナル |70 |

□ 婦人問題パンフレット □

| | | |
|---------|-----------------|----|
| 堺 利 彦 | 婦人問題の本質..... | 0 |
| 近 藤 榮 蔵 | 新ロシアの婦人..... | 10 |
| 山 川 菊 榮 | 婦人と無産政黨..... | 10 |
| 堺 眞 柄 | 婦人運動史..... | 10 |
| 織 本 貞 代 | 労働婦人問題..... | 10 |
| 山 川 菊 榮 | 無産階級の婦人運動 | 10 |

◇この他社會問題に関する内外書籍の御取次をします。圖書目録「名著だより」は二錢切手封入御申越次第御送りします。
◇月刊「赤い星」は一部三錢年三十錢、入門書として最適のもので、組合及び政黨の教育宣傳運動に、廣く活用されてゐます。新刊紹介、隨筆、書籍に関する質問欄が本紙の内容です。
◇當社發行の購讀券は五十錢、一圓、二圓、三圓、五圓の五種に分たれ、十錢の切符をそれぞれその金額に應じて綴つてありますから、書籍注文の場合は振替や爲替の手數が全然省かれて、便利重寶です。尙諸種の會合の賞品として利用されてゐます。(これは勿論他社發行物の場合も有効です)



607
84

價五十錢

